

第六節 長橋地区の地名

長橋村は明治二二年（一八八九）の町村制施行によって、神山・野里・松野木・戸沢・福山・豊成・浅井の七村を大字としてできた村です。村名については、「村中に長橋と呼ばれる溜池あり、各村には耕地が多くこの水を引いて耕作をしているからこの溜池に因んで村名とした」と『長橋村誌』に明記されています。この長橋村時代には、村役場をはじめ公的な施設が神山村に置かれていました。長橋村時代が六五年ほど続いたあと、昭和二九年（一

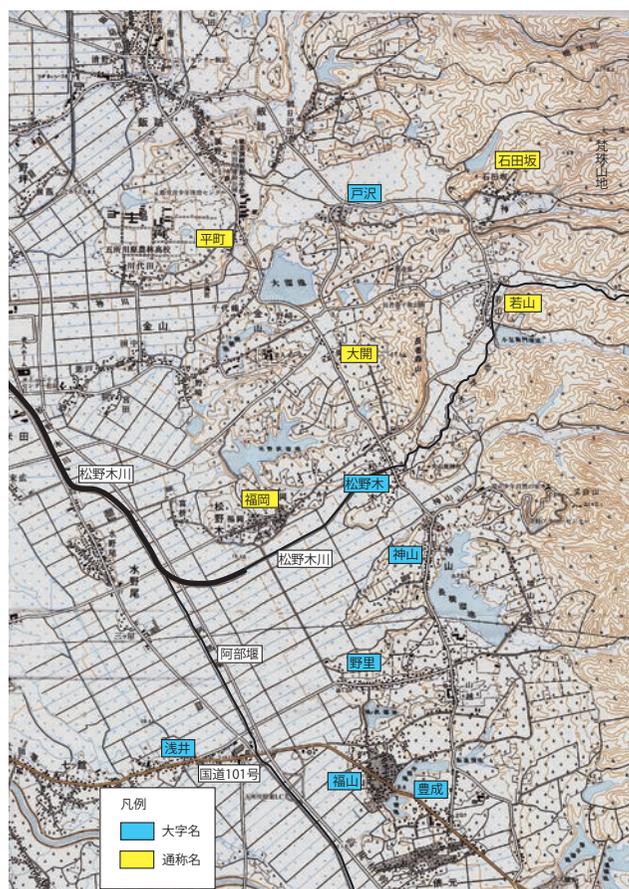


図69 長橋地区 村落案内図



図70 上原げんと碑
(梵珠少年自然の家前)

げんとは木造町出身だが、若い時から五所川原町の青年仲間と親交を重ねていたことがよく知られています。戦後「五所川原音頭」を作曲したのもその縁によると言われています。

れ集落を作りました。長橋地区は、東に梵珠山地が控え、西は津軽平野中央部に面していて、この地形が平野部の新田地方とは違った歴史のもとになっています。縄文晩期の観音林遺跡（松野木）や中世の神山館跡、長者森館跡などがそれを伝えてい

九五四）に五所川原市に合併して現在に至っています。地理的には、梵珠山地の西麓にある台地の上に連なっている大小十数カ村の集落から成り立っていました。南端の大字豊成が七和村の大字俵元と境を接し、反対に北端の大字戸沢が飯詰村と隣接していて、南北がおよそ一里七丁（約四・二km）の細長い村でした。この間を藩政時代から下ノ切通が幹線道路の役割を果たしていました。下ノ切通から枝分かれして開発を進めて独立した新田村となった村もあります。松野木村の西方に連なる福岡や下新里がそれにあたります。反対に若山・石田坂・戸沢などが山手の道に連なっていてそれぞ

ます。

一方、村の西部に広がる水田は、山麓に作られた大小数々の溜池を用水源として、津軽平野中央部の新田開発の先駆けとなっていました。その点、十川と岩木川を水源としている平地の新田地域とは違った発展をしてきました。とは言っても、南端の豊成・福山・浅井の三大字は、同じ長橋地区に入ってはいますが、他の村々より開発が遅れて、藩営俵元新田たわらもとしんてんによって、ようやく開発が完成したところです。

長橋村誕生当時の明治二四年（一八九一）には、戸数四九六戸、人口二六九一人、厩三三棟あり、学校は野里小学と松野木小学の二校が記録されています。誕生から三〇年後の大正一一年（一九二二）には、国有林が総面積の二六％を占めており、村民の林業との係わりが深い地域であることを表しています（『長橋村誌』）。

神山（かみやま）

名前を聞いただけで、神山館跡・長橋溜池・閻魔神社くわらまじんじゃ・梵珠少年自然の家・フラワーセンターなどが連想される村です。長橋村時代には、村役場や農協などが置かれていて、明治三二年（一八八九）の町村制から昭和二九年（一九五四）の五所川原市併合まで六五年間にわたって村の中心となってきました。村名は、北端にある中世の神山館跡（館主神山左京亮・左京之助とも）に由来すると伝えられています。

村の歴史は、長橋村の中では下新里・戸沢と並んで最も古く、正保二年（一六四五）の「郷帳」には、村高一九七石余のうち田方一七六余石と記録されています。四〇年後の貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には、田畑屋敷合計六二・四haのうち田方五八haと記されていて、その石高が五一三石六斗七升一合となっています。こうした開発の進展は、藩の開発奨励を受けて、いち早く開発に取組んだ小知行による自主開発の成果と言えます。

貞享検地水帳には次の一々の字名が記されています。

簾沢、日ぐらし、ことのみね、さかえ山、あられ走り、うずらの、富草、山の越、野きわ、牧ノ原、奥野

さらに、田畑のほかに漆木三二四本が書き留められています。藩が村に漆役を置いて、漆の栽培に力を入れ、特産品「津軽塗り漆器」の原料確保に努めていた表れです。貞享検地から間もない元禄三年（一六九〇）のこの村の状況について、『平山日記』には「神山村―飯詰組に属し、村位は中村、家数五八、うち庄屋一、百姓一八（三〇％）、水吞三九（七〇％）」と記録されています。水吞は自作地のない小作農家のことで、この村には地主から田畑を借りて、借り賃に当たる小作料を納めて生活している小作農家が目立って多かったことが分かります。

閻魔神社くわらまじんじゃ 神山字鶉野三四

祭神は閻魔神で、社殿入口に座っている赤鬼で知られている神社です。閻魔神は雨や水の神です（『日本の神様読み解き事典』による）。

沿革を辿ると、明暦二年（一六五六）勧請とあり、その後、明治六年（一八七三）観音堂を閻魔神社と改め、松倉神社へ合祭となり、同八年復社、翌九年一月には村社に昇格しました。さらに明治一七年五月に、松野木の観音林から現在地に移転されました。

杉派立

杉派立は本来杉漆新田と称し、杉の木を植えて育てた新田のことです。

貞享検地の準備中に神山村の庄屋嘉兵衛から提出された天和三年（一六八三）の「書上帳」には、「神山村のうち杉漆新田 屋敷数三六軒 内三軒庄屋・・・」と書かれています。杉漆新田とは杉と漆を仕立てる村のことです。元禄の絵図によると野里村が下ノ切通に繋がるあたりです。これを紹介している『長橋村誌』は、「庄屋は普通大村には一人、小村は二、三カ村に一人であるのに、この新田に限り（名前省略）三人の庄屋があったのは珍しい事で全く例外である」と書いています。

地子新田

長橋溜池の東側にあった村でしたが、今は廃村となって、りんご



図71 閻魔神社（神山の長橋溜池西部）

畑になっています。貞享元年（一六八四）に書かれた「庄屋書上帳」には「神山村のうち地子新田 屋敷数合わせて九軒、内一軒庄屋、二軒年季明け 六軒はまだ年季が明けていない」と記録されています。古い言い伝えによると、昔この村に柏木という村があったものの、一部は下柏木（梅田）へ、一部は中柏木へ移住したらしいとのことでした。

田越

神山村の枝村として天和の絵図に出ている村です。神山村の庄屋が書いた天和の絵図によると、「福岡新田捨堰」（排水路）に添った位置にありました。また、「飯詰組広田組絵図」には、下ノ切通の西方七丁五〇間の所に田越村があると書き込まれています。この村名は、田越山左衛門という長者の伝記に因んで付けられたようですが、村の取立て年代（村の始まり）ははっきりしていません。ただ『長橋村誌』は、「田越村の開村は長橋溜池築造当時の正保前後と見るべきは妥当であろう。而して俵元新田開拓の宝永の頃各村落へ分散したものであるらしい」と推測しています。



図72 伝・神山館跡遠景

神山館

村の北端（大字神山字鶉野）にある中世の館跡として知られています。神山村の名は、館主の神山左京之助からきていわれています。また、『長橋村誌』はこの左京之助が五所川原新田の開発で知られている鳴海勘兵衛の祖父に当たると記しています。勘兵衛は、初代五所川原代官を務めたあと、金木新田をも指導し、五所川原市の歴史に大きく関係した人物です。五所川原の新町にある小公園（裁判所隣り）に「鳴海勘兵衛之碑」があります。ただ、縁が深いと言われる神山館については、中国産の青磁碗や日本産の焼物の破片が出たというだけで、研究者の間でも史料に裏付けられた実体はよく分っていないようです。

長橋溜池

下ノ切通の神山地区東側にあり、金山大溜池と共に山麓溜池中屈指の大きさで知られている用水池です。『津軽平野開拓史』年表には寛永年間（一六二四～四三）に造られたとあるだけで、造られた経緯も年代もよく分っていません。寛永年間は、弘前藩の奨励をも



図73 長橋溜池

とに家臣や有力農民が自主的に開発を始めた時期に当たります。この大溜池は下流に大規模な水田が早くから開発されていた証です。なお、この大溜池は前記のように明治二年（一八八九）に発足した「長橋村」の名前のもともになりました。

この長橋について、菅江真澄は『外浜奇勝』（寛政八年・一七九六）で次のように書いています。

「杉羽立という村のあとを通り、むかしかかっていたが、いまは名ばかり残っている長橋というところで、広い池（長橋溜池）がよこたわっているのを見わたした。こうしてゆくゆく心に浮かんだことを歌により、神山というところにきて、村のはずれにある井杭の柳に歌をかきつけた。

『草たかみ野越えはら、こえわけ来れば そのかみやまの麓也けり』
小学校

小学校が長橋村に初めてできたのは、明治九年（一八七六）の野里小学と、同一年の松野木小学の二校でした。初めは「小学校」ではなく、「小学」と呼ばれました。野里小学の学区は、長橋地区南部の大字神山・福山・野里・豊成でした。まだ校舎がなかったの、福山村の相馬吉之進（校長）の家で授業をし、明治一二年（一八七九）には野里へ、同三五年には神山へ移転し、平成五年に松野木小学校と合併して長橋小学校ができるまで続きました。

明治一二年（一八七九）の生徒数は、四五人でしたが男子四二人に対して、女子は三人だけでした。これは女子が家事や子守役のために小学校に入れてもらえなかったためでした。

野里 (のぎり)

野里村は早くから開発された村です。藩の記録に野里の名が最初に出てくるのは、幕府に提出した寛文四年(一六六四)の「郷帳」で、「高四八九石一斗」と出ています。ところが旧家の由緒書には、それ以前の開発記録があります。

①「二代須藤彦右衛門が・・・信義公(三代藩主)の御代に、野里村に於いて新田開発を成功させた功績によって、慶安四年卯年(一六五二)知行高三〇石を拝領して小知行を勤めた」(福山村須藤利三郎家由緒書)

②「先祖土岐助左衛門が、野里村で新田を開発して万治三子年(一六六〇)に三〇石を頂戴して・・・」

こうした早くからの新田開発が積み重ねられて、前記の寛文四年の「郷帳」に記録されたと考えられます。

その後実測調査をもとにした貞享四年(一六八七)の「検地水帳」には、七つの字名、野さわ・牧ノ原・境山・日ぐらし・奥野・富



図74 野里 松倉神社

草・簾沢にわたる総面積と総石高が次のように記録されています。田の面積 五七・二ha余―高四五三石、畑屋敷の面積二六・五ha余―高八七石、田畑屋敷合計九三・七ha
この「検地水帳」には「漆木四一本」とも記されて、ところどころに漆守が置かれて、漆木の栽培を指導管理していたことを裏付けています。

なお、『平山日記』の元禄三年(一六九〇)条には、野里村について「飯詰組に属し、村位は中村、家数四二、その内、庄屋(万九郎)一軒、百姓一八軒(四五%)、水呑(小作人)二三軒(五五%)」と記されていて、当時の野里村の農家の大小(階層)の様子を伝えていきます。

明治二四年(一八九一)の記録「徴発物件一覧」には、野里村の戸数八一軒、人口六〇四、既七三と記されています。江戸時代の開発当初には野里村の本村であった神山村が、同じ記録で戸数・七五軒、人口五一七人、既六五と記されていて、どの項も本村だった神山より野里の方が多くなっています。



図75 松野木集落を流れる松野木川 手前が上流

松倉神社まつくらじんじゃ 野里字牧ノ原

梵珠山にある松倉神社の遙拝所の一つです。この松倉神社は藩政時代から津軽三十三観音の中でも最も古い観音として知られていました。

遙拝所となったのは、文政元年（一八一八）とされていますが、一説には文化元年（一八〇四）とも伝えられています。ここ野里の他に元禄一五年（一七〇二）正月に設けられた原子の遙拝所（今はない）と明治八年（一八七五）設置の前田野目遙拝所もありました。野里の松倉神社は、境内に三十三観音像が建立され手厚く保存されています。

松野木（まつのき）

松野木は下ノ切通に沿って長橋地区の北部にあり、下新里・福岡・若山・大開を枝村とした大字です。本村の松野木村は初め「松野木代村」と呼ばれていました。この松野木代村の西に伸びる台地に福岡村と下新里村があり、反対の東には長者森を隔てて若山村があ



図76 堺野沢溜池

り、さらに下ノ切通に沿って北に大開村が連なっていました。

明治九年（一八七六）には下新里・福岡・若山を併合し、明治二年（一八八九）の町村制施行で大字松野木となりました。

松野木村の名が初めて出てくるのは、寛文四年（一六六四）の「郷帳」で、「松野木村 二〇一石八斗」という記述がそれにあたります。松野木代村の開発は寛文四年の「郷帳」より一〇年ほど早い承応、明暦（一六五五〜五七）の頃まで遡るとも推測されています（『長橋村誌』）。その後、貞享検地に先立って松野木村の庄屋久兵衛が藩に提出した「天和の書上帳」にも松野木代村として「松野木代村 屋敷数合計三〇軒、その内一軒は庄屋屋敷、もう一軒は抱地屋敷、三軒は一年作（小作農）屋敷、あとの二五軒は給地屋敷」と書かれています。給地屋敷とは弘前藩の武士が城下から離れた地方に持っていた屋敷のことです。この松野木代が松野木と改名されたのは、貞享四年（一六八七）の「検地水帳」からです。それ以来、現在まで松野木という地名が続いています。貞享検地から間もない『平山日記』元禄三年（一六九〇）条に松野木村の様子が次のように書き留められています。

「家数三〇軒、松野木村二一軒、若山村九軒、そのうち一軒は松野木村の庄屋久兵衛、一三軒が百姓、一六軒が水呑」

貞享四年の松野木村検地水帳によれば、この村には（枝村の若山村を除く）一一の字名があり、田畑屋敷合わせて約四三ha余、分米約二六一石余と記されています。字名は、あり俵・早田・松本・みの捨・ほろかけ・林上・かけひ・葛野・山崎の九つがあります。

大山祇神社 松野木字中子三四

祭神は大山祇命おおよまつのみことです。勧請の年月は不明ですが、明治六年（一八七三）四月に新山権現堂を大山祇神社と改め、村社となりました。同年六月に福岡八幡宮、水野尾稻荷神社、富升稻荷神社を合祭ごうさいしましたが、同八年二月にこれらの三社が分離され大山祇神社は復社しました。明治元年と大正六年（一九一七）一二月の改築の後、昭和二年（一九一七）三月末には国有境内地無償譲与が許可され、昭和六三年七月に幣殿と拝殿が改築されました（幣殿とは、本殿と拝殿との間にある建物で、幣帛へいはくという絹を供える所）。

次に明治九年（一八七六）の村落の統廃合で松野木村に合併された四つの村と神社を紹介します。

福岡

松野木代村の枝村で、寛文四年（一六六四）以降に斎藤藤七によって開発され新田村です。貞享四年（一六八七）年の「検地水帳」には、松野木代村から独立した村として、田畑屋敷合わせて四八・七ha・村高約二二七石と記されています。字名は、松本・ほろかけ・千刈・みのすて・かけひの五つが記されています。

八幡宮 松野木字福泉二〇〇

福岡八幡宮の祭神は譽田別尊ほんだわけのみことです。承応二年（一六五三）勧請、明治六年（一八七三）四月、松野木大山祇神社へ合祭、同八年に復社し、翌九年に村社に列せられました。同一三年一月には本殿を改築し、昭和五年（一九五〇）一月には、国有林境内地無償譲与を許可され、昭和五年（一九七七）には、幣殿と拝殿の改築を

行いました。

下新里

天和期（一六八一〜八三）には松野木代の枝村でしたが、開発は親村の松野木代村より早く、正保二年（一六四五）の「郷帳」には、「下新里一五三石四斗五升」と記されています。貞享四年の「検地水帳」では福岡村の枝村に変更され、一時平田村と名を変えていましたが享保一二年（一七二七）に下新里村が復活しました。

若山

長者森の東側にあつて、梵珠山地の西麓に南北に続く集落で、近くは松野木川の上流地域にあたります。古くは中師ちゅうし（仲子・中子とも）村と呼ばれていましたが、貞享検地の際に若山村と改名されました。長者森と村の間にある田畑屋敷合わせて二七・四ha余の山村です。「検地水帳」には字名として、かけ日・堤ノ沢・有俵・早田・山崎・松本・鬘懸まろかけ・林上の八つが記されています。

享保一一年（一七二六）には松野木村から分村独立しましたが、明治九年（一八七六）に松野木村と合併しました。

大開

長者森の西麓にある下ノ切通に沿った村ですが独立した村落として検地水帳には出ていない小集落です。よく津軽民謡「弥三郎節」に出てくる大開村との関連を問われますが、それを裏付ける記録も伝承もありません。村の歴史は、貞享元年（一六八四）に松野木代村の庄屋が藩に提出した「書上帳添図」に「福岡御蔵新田」とあることから、福岡村と同じ時期に開発が始められたと見られます。そ

の後、享和から文政期（一八〇一～二九）にかけて、四五左衛門がさらに再開発に取り組み「下松野木」と称したと『長橋村誌』と『青森縣史』に記されています。

長者森館跡

下ノ切通の大開村東方に連なる高さ一〇七・六mの小高い山の上にある館跡です。平成三年の縄張り調査によって、この館跡の年代や役割についての見方が次のように示されています。戦国時代に戦争が始まった時に立てこもる詰城つめじろとし、時間を稼ぐために造られた館跡と見られています。空堀が大規模に作られていることから、軍事的緊張が高まってきた戦国時代に改築されたと見られています

（『五所川原市史 史料編1』）。

また、「長者森館跡は、戦争の際に逃げ込むために作られた城跡で普段は使われていなかったと考えられる」とも記されています（『五所川原市史 通史編1』）。

戸沢（とざわ）

大字戸沢は、長橋村の北端にあり、北は飯詰に、西は旧松島村の金山に接しています。明治九年（一八七六）に東の石田坂村と西の平町村の二村が戸沢村に合併し、明治三二年（一八八九）の町村制で大字戸沢となりました。

戸沢村は梵珠山麓の台地西麓にある集落で、北方に広がる狭い山間平地を開拓して生まれた村です。開発の初期、戸沢村は金山村の

一部として、二代藩主信枚の時代から開発の対象とされていたことをうかがわせる寛永三年（一六二六）の記録もあり、この村の古さを伝えていきます。その後、神山・下新里（福岡）と共に、正保二年（一六四五）の「郷帳」に村名が出て、「高一〇〇石」と記録されています。同じ「郷帳」に出ている「五所川原村 六二石五升、唐笠柳村 七五石五升」などに比べても石高が大きく、早くから開発されていたことがわかります。その数年後に書かれた「慶安の図」には家数一〇軒と記され、さらに下って天和四年（一六八四）の「書上帳」には、「戸沢村家数一六軒」と書かれていて、村の草分け（創始者）は仙庭万平と伝えられています（『長橋村誌』）。

貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には、字名が玉清水と山ノ井の二つで、田三五・九ha余―分米三〇八石九斗余、畑屋敷約四・五ha―分米一三石三斗余、田畑屋敷合計約四〇・四ha―分米約三三二二石三斗と記録されています。

菅江真澄が寛政一〇年（一七九八）七月二三日に、松野木と金山の間からミソハギのさかりのなかを戸沢村に差し掛かったときの一文が浮んできます。「いろいろのこき紅のむしろを、ちまたのやうに、ちまちがほどもしきたらんかと見やられたるも、あへかにめとどまりぬ」意味を確かめ切れないうまま、言葉の響きだけが残っているくさりですが、幹線から離れた山村に光がさしたようです（『菅江真澄全集・第三卷「錦の浜」』）。

石田坂

石田坂村が記録に最初に出るのは貞享元年（一六八四）の「郷村

帳」で、寛文四年（一六六四）以降の新田として、八三石と出ています。天和四年（一六八四）の「石田坂庄屋七右衛門の書上帳」には、「家数六軒 内三軒御藏（本百姓）・三軒水呑」と書かれていて、草分けは齋藤七右衛門又は齋藤宇右衛門とも伝えられています（『長橋村誌』）。

貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には、字名が「前田」の一つだけで、田五・四ha余―分米四四石四升五合、畑二・八二二五ha―分米八石一升三合、田畑屋敷合計八・二四ha―分米五二石五升余と記録されています。

明治二年（一八六九）の「郷村高戸数人口租稅書」などの記録には、「高四十三石余・戸数十二軒、人口九〇」とあり、明治九年（一八七六）には戸沢村に合併されています。

この村には、元禄初期に発生した生類憐みの令違反事件の歴史があり、これまで誤って、伝えられていたので、調査により判明した事実を書き留めます。

「生類憐みの令」と石田坂村

元禄四年（一六九二）八月、石田坂村の農民たちが五代將軍綱吉が発した「生類憐みの令」に違反した罪で捕らえられ、遠島に処せられた事件が起りました。この事件は、『平山日記』をはじめ津軽の多くの歴史記録に、次のように伝えられてきました（『北奥文化』第一五・一六号）。

①石田坂の百姓三人が、②鹿一疋を獲って食ってしまった。それが発覚して大問題となり、きびしい取調べにより、③三人とも金網

駕籠で江戸に送られ、④八丈島に流刑を仰せ付けられた。⑤その他のことは、伝えられていない。『長橋村誌』年表や『青森県地名大辞典』には「宝永六年赦免となり、帰国した」と書かれています。ところが、弘前藩の「国日記」と「江戸日記」には、これまで流布されていたことは違う事実が詳細に記録されています。その要点を、流布されていたことと対比すると左記の違いが明らかになりました。

①捕らえられたのは三人だったが、②獲って喰った獲物は、鹿ではなく熊であったことが明記されている。

③江戸に護送されて流刑に処せられたのは、三人ではなく唐丸駕籠に載せられた治兵衛一人だけで、他の二人は、治兵衛の妻子三人と共に、藩士に付添われて野内の関所を越えて南部領へ追放に処せられた。

④流刑先は、八丈島ではなく伊豆諸島の新島であった。新島には「新島流人帳」が保存されており、その中に、治兵衛が流刑されていた事実が明記されていて、「藩日記」（「国日記」・「江戸日記」）が事実を伝えていることが確認できる。一方、「八丈島流人銘々伝」には治兵衛の記録は全く見当たらない。

⑤流刑された治兵衛は、將軍綱吉の死去による生類憐みの令の解除（宝永六年・一七〇九）と同時に赦免され、江戸屋敷を経て弘前まで帰国した。（新島の流刑生活は一七年半に及んだことになる。）

⑥南部に追放された治兵衛の妻子三人と仲間二人の五人については、治兵衛の弘前帰着を伝えている「国日記」の宝永六年（一七

○九）一月一六日条に、次の記述があります。

「一、右治兵衛の同類武人と同妻と子供武人の合わせて五人はその時分南部へ越山仰せ付けられ候。このたび御赦免に就き、右の者の住所相たずね、成るべくだけは呼び返し候ようと、郡奉行へ申し渡す」と。つまり、二〇年近く以前に南部に追放した五人を探して、できるだけ呼び返すように

手配したということです。法的にはつじつまが合うとしても、この五人の消息については全く不明のままです。

以上、「国日記」と「江戸日記」をもとに、生類憐みの令違反事件をたどってきましたが、事実に基づかないことが歴史として長いこと伝えられていることがあることをあらためて知らされた次第です。

また、この事件については、当時の時代状況を考え合わせると、石田坂の人たちは、悪法の犠牲にされた思いがつのってきますが、ここでは誤伝を正して若干の補足を加えるに留めます。



図77 平町（坂の向こうは飯詰地区）

平町

飯詰地区南部の南向き斜面にある小集落です。斜面にあるにも関わらず「平」と「町」の文字がついているので、謎のある村名と言われてきました。特に「平」がつくのは理解し難く、村民の「平」の文字に対する強い願望によるものかと想像をかきたてられます。地名はともかく、この村は、貞享元年（一六八四）の庄屋六兵衛の「書上帳」によれば、当時は飯詰村の枝村で「平町地子新田」とあって、書上帳よりさらに四〇年ほど前の寛永一八年（一六四一）に開拓された古村でした。平町地子新田が独立村の「平町村」と認められたのは貞享検地水帳が初めてです。

貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には、字名が狐野の一つだけで、田はなく、畑が約二・六ha、高一二石二斗九升四合（うち屋敷が〇・七一二八ha―高五石七斗五升五合）と記されています。

明治九年（一八七六）に戸沢村と併合するまで独立村として続きました。この戸沢村への併合が、以後飯詰村から離れて長橋村の所属となるきっかけとなりました。

白山姫神社 戸沢字玉清水一六八

戸沢北部に広がる平地の東部山麓に鎮座しています。祭神は白山姫命で、慶長二年（一五九七）の勧請と記録されているから、この地域では最も古い神社のひとつです。ところが、由緒沿革からは明治六年（一八七三）以後のことを若干辿るだけにとどまりました。

明治六年四月、白山権現を白山姫神社と改めて、飯詰の八幡宮に

合祭しましたが同八年には復社しました。翌九年一二月には村社に昇格し、大正二年（一九一三）に拝殿を新築し、昭和八年（一九三三）には、幣殿を新築して現在に至っています。

福山（ふくやま）

福山は豊成・浅井と共に長橋地区の南端にあつて、俵元新田八カ村の一つです。俵元新田は飯詰組代官であつた阿部亦右衛門またえもんの計画によつて開発された藩営新田です。具体的には堺野沢さかいのさわ（福岡）・餅ノ沢（野里）などの溜池を造つて灌漑用水かんがいづみを確保し、さらに排水路を掘り通して松野木川に結び、松野木川以南の湿地に新田を開発する事業でした。宝永元年（一七〇四）に着手し、途中、亦右衛門は失脚しましたが、二四年後の享保一二年（一七二七）に完成しました。排水路の阿部堰の名は、阿部亦右衛門の功績に因んで、堰の完成後に名付けられたと伝えられています。福山村は俵元新田完成後の元文元年（一七三六）「検地水帳」によると、田畑屋敷合計面積約四八・二ha、分米高二四七石七斗余の新田村となりました。字名は三好・広富・米ヶ森の三つです。

明治二年（一八六九）の村の状況は、人口二二九・戸数三二二・馬四四でした。また、用水溜池は前記の二つのほかに四ツ屋池（現、下溜池）・街道池・長十郎池・かも助池・中溜池などがあります。

稲荷神社 福山字広富一七一

祭神は宇賀魂神うがのみたまのかみ、猿田彦大神さるたひこのおおかみ、大宮廻賣神おおみやのめのかみの三柱です。伝承によ

ると、建立は正徳元年（一七一）四月ですが、明治六年（一八七三）五月には松倉神社に合祭され、同八年二月には復社し、翌九年一二月には村社となっています。同四二年（一九〇九）八月には豊成の稲荷神社と合祭となつた記録がありますが、その後の経緯は不明のようです。

豊成（とよなり）

旧長橋村の南部にあり、福山・浅井と共に藩営俵元新田の開発によつて、宝永元年（一七〇四）に開村した村です。根拠はありませんが、一見すると豊作祈願を込めて名付けられたような響きのよい村名です。これとは別に、この地域に豊成公という殿様が住んでいたという口伝もありますが、これが村名に関わっているという積極的な説にはなっていないようです（『長橋村誌』）。

田子ノ浦

元文元年（一七三六）の「検地水帳」には、この村の字名として「田子ノ浦・笠ノ前」の二つが記されていますが、万葉集の名歌が



図78 福山の下溜池 岩木山麓が見える。

想起される「田子ノ浦」は、津軽平野中北部一帯が十三湖の一部であつた時代の記念名と伝えられています。

〳田子の浦ゆうち出でてみれば真白にそ

富士の高嶺に雪は降りける

豊成村は、田の面積一三・六六ha余・分米約八〇石、畑の面積一七・五ha余・分米三三石四斗余、田畑合計三一・二二ha余・分米一三三石三斗余、うち九五%が下田と下々田で占めていました。

それより一四〇年程後の明治一〇年（一八七七）には、次のように記録されています。

豊成村 田二七・六ha余、畑宅地二二・三ha余、戸数一六戸、人口八二人（男四二・女四〇）、馬数二二頭（牡）等。

豊成村は、昭和二九年（一九五四）の市制施行で五所川原市の大字となりました。

昭和四七年（一九七二）には長橋中学校と七和中学校が統合して五所川原第二中学校が豊成地内に設置されました。第二中学校は平成二三年八月に市内羽野木沢にあつた旧五所川原高等学校東校舎に移転しました。豊成にあつた第二中学校は四〇年間続きました。今は太陽光発電のパネル設置場となっています。

浅井（あさい）

豊成・福山と同じく俵元新田八カ村の一つで、初めは安田村と呼ばれていました。長橋地区ではただ一つだけ阿部堰の西側にあり、

栄地区の七ツ館と接している上、南方に十川が流れているので、栄地区に所属していると見られがちです。長橋地区の他の村々と違い、ただ一村、平坦地にあることもそう見られやすい要因です。安田が浅井と改称されたのは、享保一年（一七二六）で、元文元年（一七三六）の検地より一〇年ほど早い時期からでした。

元文元年の「検地水帳」には、種取・西広・色吉の三つの字名があり、生産基盤となる田が六五町五反余、分米四〇九石余、畑屋敷二一町二反余、分米六九石五斗、田畑屋敷合計八八町二反余、四七八石と、全名請人の名が明記されています。他に年貢免除地として、浄西庵の屋敷地と稲荷神社地の二つが書き添えられています。

さらに、明治二年（一八六九）の「郷村高戸数人口租税書」には、「浅井村 高四七一石三斗、戸数四四戸、人口二八五人、馬二八匹」と記されています。二〇余年後の明治二四年（一八九一）の記録には、戸数六六戸、人口三〇八人、馬屋四九とあり、農村としての発展の様子を伝えています。尚、昭和五年（一九八〇）には、世帯数七二戸、人口三三八人と明治後半以降の発展が表れていますが、馬の記録がないのは、戦後農業の機械化の表れです。また世帯数七二戸のうち農家総数が五七戸に（七九%）減少し、さらに専業は三戸（五%）、兼業が五四戸となっていて、戦後農村の変容を表しています。

稲荷神社 浅井字色吉二八

祭神は宇賀魂命と、大宮廻賣神の二柱で、由緒沿革は次のように記録されています。

建立は享保一五年（一七三〇）までさかのぼります。明治六年（一八七三）に松倉神社に合祭されましたが、同八年二月には復社し、翌九年一二月に村社に昇格しました。



図79 稲荷神社

第七節 松島地区の地名

松島村は、米田・唐笠柳・吹畑・漆川・石岡・太刀打・一野坪・金山・水野尾の九大字から成り立っていました。西は旧十川を境として五所川原町に接し、東には梵珠山を仰ぎ、南は栄村に、北は中川村に連なる農村ですが、水野尾から漆川に流れる松野木川を境として、右岸の大字金山と富升（明治九年、米田の一部となる）だけが梵珠山麓の台地に連なっています。左岸の低湿地帯とは違って比較的用排水に恵まれていたので、その後の村の発展の歴史も違っていました。また低湿地以外の平野部が小知行による自主自力の開発が進んだのに対して、湿地帯の阿部堰・松野木川の流域は、藩営俵元新田によってようやく開発されたという違いがその一例です。

明治三二年（一八八九）四月から町村制施行にあたり、郡長心得対馬貞太郎が県に提出した文書に「松島村は、金山、米田両所に松島と称する数百町歩にわたる広大な耕地があって、その名が地方に知られている。故にこれを新名とした」とあります。これが



図80 エルムの街遠望

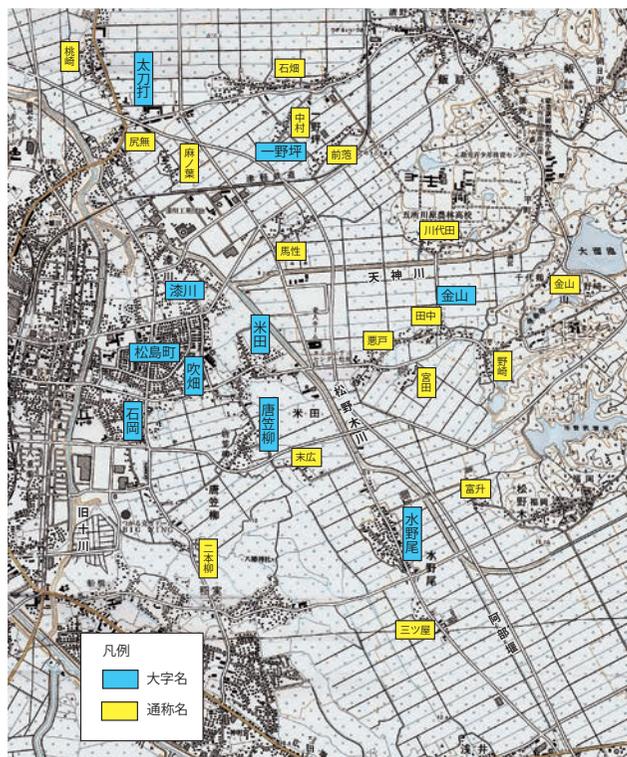


図81 松島地区の村落配置図

松島という村名の由来です。松島村誕生後、昭和三九年（一九五四）に五所川原市の一部となり、松島という村名は使われなくなりましたが、昭和四二年（一九六七）に完成した住宅団地松島町・市立松島小学校・コミュニティセンター松島などにその名が引き継がれています。近年に至り、五所川原地区と松島地区を隔っていた旧十川周辺から都市化が急速に進んでいます。松島村の唐笠柳字藤巻にできたエルムの街がその典型といえます。以下、松島村の各大字に目を向けていきます。

吹畑（ふきはた）

吹畑村は、松島村時代には村役場や農業団体の事務所など公的な施設が置かれて村の中心となっていました。南に石岡と唐笠柳、東に米田、北に漆川などの村々が接し、西は広い水田を隔てて五所川原町に続いていました。この水田地帯は漆川、石岡村の一部とともに、昭和三九年（一九六四）に住宅地が造成され、昭和四二年（一九六七）五所川原市松島町となりました。市の周辺都市化の先駆けといえます。

吹畑村は、江戸時代前期に弘前藩が進めた新田開発で誕生した新田村の一つです。初めは藩の奨励を受けて、武士や有力農民が開発に取り組みました。農民でも自力で自主的に開発を成し遂げれば、武士に取り立てることになっていたのです。この村でも自主開発が認められて武士になつた農民がいたことがうかがわれます。吹畑村の名が最初に記録にあらわれるのは延宝四年（一六七六）の

「ひろすおんはだちのす 広須御派之図」
で、「ふき畑村」



図82 蘭菊会発祥之地碑

と見え、また、貞享元年（一六八四）の「郷帳」には、「二二六石九斗 吹畑村」と出ています。

さらに三年後の貞享四年（一六八七）の「検地水帳」からは、もっと詳しいことを知ることができます。吹畑村には一六人の農民がいて、田畑屋敷の合計約二六・五haを耕作し、米二三〇石の生産を上げていました。村は藤まき・村崎・みな瀬の三つの字名に区分されて、今も続いています。この頃の村は隣の唐笠柳村や漆川村に比べると小さい方でした。『平山日記』の元禄三年（一六九〇）条に、村の庄屋が石岡村と兼任となっていたと書かれているのもそれによると思われます。

貞享検地から三年後の元禄三年には、吹畑村に武士の位を持った名前が一人いたと記録されています。このうちの五人は、貞享四年の「検地水帳」に名前が出ていた農家です。これらの記録から、吹畑村は、藩の奨励を受けて自主開発に成功した人たちが中心になつてつくつた村といえます。

明治の新时代に入ってから、明治一〇年（一八七七）に吹畑小学が開設され、同一二年には近隣の二本柳村・石岡村・唐笠柳村・米田村・漆川村・馬性村の五カ村を学区として教員二人、生徒五四人（男五三、女二）で庶民の初等教育が始まりました。

明治二二年（一八八九）の町村制で、松島村大字吹畑となりました。戦後の昭和二九年（一九五四）に五所川原市大字吹畑となりました。

文化面で忘れられない歌人・書家の和田山蘭について書き留めます。山蘭は神官職の和田家の長男でしたが、教職に進んで和歌に励

み、隣の漆川村の加藤東籬と共に明治三九年（一九〇六）に短歌結社「蘭菊会」を作って、近隣や県内各地の歌人と共に回覧の会誌を介して研鑽と交友を深めました。同時に中央歌壇との交流を深めました。この過程で山蘭は歌人若山牧水の勧めで上京し、教職と歌人の活動を続ける一方、書家としても一家をなしました。生家和田家の庭には、棟方志功揮毫の「蘭菊会発祥之地碑」があり、さらに市内の柳町旧堤防跡には、若山牧水の蘭菊会訪問を記念する牧水歌碑が建立されていて、蘭菊会と若山牧水との深い交流を伝えています。

金山（かねやま）

金鉱山が連想される村名ですが、この名の由来は公的な記録で確かめられてはいません。東は市の東部台地から西は松野木川まで、北は馬性村、南は富升村に接しています。貞享元年（一六八四）頃までは、悪戸・田中・宮田と東部台地縁辺の野崎と金山（通称、本金山）の五つの村をまとめて金山村としていました。その北に連なる川代田村と天神村（現在は廃村）は貞享元年（一六八四）の「郷帳」に名が見えており、金山村からは独立していました。ところがこの両村が明治九年（一八七六）に金山村に合併したあと、明治二二年（一八八九）の町村制によって金山村は松島村の大字となりました。

金山村の名が最初に出てくる記録は、寛永三年（一六二六）の「金山之内戸沢村之派之事」と題する文書です。次いで正保二年

（一六四五）の「郷帳」には、高二六〇石と記されています。

天神村と川代田村が独立していた当時の貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には、

金山村 一一二・三六ha、八七三石

天神村 二五・五ha、一〇三・五石

川代田村 一二・七ha、八六・三石

と記録されています。

金山村には、中世末期から江戸時代初期にかけてと見られている金山館跡（小山内主膳・六三〇石）があります。さらにこの地区では、東部山麓に連なる大小数々の溜池が用水源となり、早くから川

水に頼らない新田開発が進められてきました。大溜池・姥溜池・上溜池・下溜池・堺野沢溜池、

ジュンサイ溜池・川代田の上溜池・下溜池などです。中で

も最大の金山大溜池は、弘前

藩の新田開発初期（二代藩主信枚の代）にはすでに造成されていたと伝えられています

が、造成の主体や時期は特定

されていません。近年、漆川

地点で松野木川の水をこの大溜池までポンプアップし、南方の長橋溜池や堺野沢溜池に



図83 金山大溜池

も流下させてそれぞれの灌漑用水に利用しています。

神明宮 金山字千代鶴、通称本金山ほんかねやまの西端にあり、本金山の住民を氏子として今も保護されています。祭神や創立年代は不明です。

八幡宮 金山字盛山八六一二（通称、野崎）に鎮座している誉田ほんだ別尊みことを祭っている古い神社です。創建は、慶長二年（一五九七）と記されています。明治九年（一八七六）に村社となりました。

泉神社 金山字泉田三二にあつて別雷命わかづかみのみことを祭っているとされます。勧請年月は不明です。明治六年（一八七三）村社となりました。昭和二年（一九〇七）国有境内地無償譲与を許可されて現在に至っています。支村の田中・悪戸・宮田の産土神として崇められています。

天満宮 金山字梅ヶ枝五にあり、菅原道真を学問の神として祭っています。寛文八年（一六六八）の勧請かんじゆと伝えられますが、明治九年に村社となって現在に至っています。

明治九年（一八七六）には学制により金山小学が通称田中に新設されました。昭和九年（一九三四）には一時松島尋常小学校の分教場となりましたが同一二年には独立しました。戦後の新学制になってから同三六年（一九六一）に松島小学校、水野尾小学校、金山小学校の三校が、五所川原市最初の統合校市立松島小学校として、現在の米田に新築移転しました。

悪戸には「コミュニティセンター松島」があり、また田中には、「かいどうふれあいセンター」があり、地域住民の交流の場となっています。

水野尾（みずのお）

藩営俵元新田八カ村の一つで、「水能尾村」と書かれている記録もあります。梵珠山麓から流れてくる松野木川が県道に突き当たって北方に屈曲する地点から、南方に続く県道沿いの村です。北は米田村に、南は同じ俵元新田の浅井村に接し、東の丘陵には富升村・神山村・野里村が広い水田を隔てて遠望される新田村です。

この村は、排水困難な低湿地帯を藩営によってようやく開発してきた新田村です。つい近年まで村の幹線道路に沿って南北に流れていた阿部堰あべぜきがその名残です。阿部堰は、この湿地帯を藩営によって開発することを企画した代官阿部亦右衛門の名に因んで名づけられた排水堰です。

元文元年（一七三六）の水野尾村「検地水帳」には、五つの字名、唐松・かけひ・千かり・清川・宮井にわたって、田 八七・二 ha、畑屋敷三・八 ha、合計九一・二 ha 弱、村高約五九一石と記されています。『平山日記』享保一二年（一七二七）条に「飯詰組添俵元新田八ヶ村、五ツ成より



図84 阿部堰の新流路
市農協近くから北方に流れている。

四ツ成まで有」の中に、「下五 水能尾村」（村位は下、年貢率は五公五民）と記録されています（『五所川原市史 史料編2上巻』）。面積・生産高共に同新田八カ村の中では最大で、全体の面積の二六％、石高では三二％を占めています。

明治に入った頃の水野尾の戸数は七戸です。これには村の南端にできた支村の三ツ屋村の五戸が含まれています。三ツ屋は本村の外側に新しくできた村のことで、いわゆる「水屋・派立」のことです。

村の道路に沿って松野木川に繋がっていた阿部堰は、浅井地区の国道との交差点から新しく北よりに掘削されて、松野木川とかつての合流地点より上流で合流しています。

水野尾小学が開校したのは、明治一二年（一八七九）で、生徒数は男子だけの四七人で始まりました。昭和九年（一九三四）には、水野尾尋常小学校は吹畑・金山・一野坪の小学校と統合し、松島尋常小学校の分校場となりますが、三年後の同一二年には、それぞれ独立校に復帰しました。同三六年には松島、金山、水野尾の三小学校が統合して市



図85 唐笠柳八幡宮

立松島小学校となり、校舎は米田に新築されました。

稲荷神社 水野尾字宮井一五三にあり、正徳元年（一七一）の勧請です。明治六年（一八七三）に松野木の大山祇神社に合祭されましたが、同八年には復社し、村社となりました。

唐笠柳（からかさやなぎ）

唐笠柳村は、五所川原市の東部にあり、南は稲実、東は末広・米田、北は米田・吹畑、西は石岡と五所川原の中央地区などに接している平野部の集落です。村の中に、平野部には稀な縄文時代晩期の藤巻遺跡があることから注目されてきました。この一帯の平野部の中では他の村々よりも早くから開発された村の一つといえます。

藩政時代に入ってから記録をたどってみましょう。

慶安二年（一六四九）に藩が十川と岩木川の掘り替えや堤防の新築を始めた記録がありますが、唐笠柳村はこの年に近くの石岡村や姥菟村と共に開発されていました。初めは「傘柳」とも呼ばれていました。村内にあった傘形の柳の巨木に因んでいると伝えられます（『平山日記』）。

開発後の生産高を見ると、正保二年（一六四五）の「郷帳」に七五石、寛文四年（一六六四）の「郷帳」に村高三〇七石、貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には村高五六八石、天保五年（一八三四）の「郷帳」には村高五八四石と記録されていて、生産力が順調に伸びてきました。村には藤巻、みな瀬、むらさきの三つの字名が

あつて、合わせて田が五一・八ha余、畑と屋敷が約一八haの広さを占めています。すべて武士や大農家たちが藩の奨励を受けて自力で開発した小知行開発の地域です。水田に欠かせない用水は、浪岡から流れてくる十川から引いていました。

この村についても一つ目に付くのは、開発者の中に武士の名前が目立つことです。郷足軽という古くからこの村に住んでいた足軽という位の低い武士が多い中に、飯詰組代官神助右衛門というやや位の高い役人も住んでいました。五所川原や金木地方の新田開発を早くから手がけていた毛内茂右衛門という郷警固役もその一人です。茂右衛門は毛内家の初代で、寛文元年（一六六一）に唐笠柳で自主開発を行い、高三〇石の小知行に取り立てられました。さらに一〇年後には、金木の川倉川と妻ノ神川の排水掘削に自費を投じて、五〇〇〇人近い労務者の賃金に当てて掘削を完成させたことで著名な開発者です。このように見ると、唐笠柳村は早くから五所川原地方の新田開発の拠点の一つだったことがわかります。

明治の新しい時代になった頃には、戸数二九戸あり、明治二二年（一八八九）から松島村の一大字となり、昭和二九年（一九五四）に五所川原市に編入されました。

その後、市勢発展に伴い、旧地域の東部に連なるここ唐笠柳の藤巻地区の水田地帯に平成九年、エルムの街ショッピングセンターがオープンしました。

八幡宮 一六世紀後半の建立と伝えられ、以来隣接の吹畑村と石岡村の人々の産土神うぶすながみとなっています。

二本柳にほんやなぎ

石岡村の南方に田地を挟んで繋がる二本柳は、石岡村と同じ時期に開発された新田村です。貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には田畑屋敷合計約八・三ha、村高七六石と記され、小さいものの独立した二本柳村として記録されています。字名はむらさき、藤まきの二つで、『平山日記』には在宅の手作り小知行として、山本九郎右衛門やまもとくろの名が見えます。元禄三年（一六九〇）には近隣村と同じ広田組の一村でしたが、明治九年（一八七六）に唐笠柳に合併して独立村ではなくなりました。

石岡（いしおか）

石岡村は、明治二二年（一八八九）の町村制施行以前からの村名で、南に二本柳村、東に唐笠柳村、北に吹畑村、西には旧十川を挟んで五所川原町に接していました。町村制以降は、松島村の大字の一つとなり、昭和二九年（一九五四）に五所川原市と合併してから、五所川原市の一大字となり現在に至っています。

石岡村は、近隣の村々と同じように、弘前藩の新田開発によってできた新田村です。

石岡村が初めて記録に出てくる貞享元年（一六八四）の「郷帳」には、寛文四年（一六六四）以後の新田として、高二二〇石余と出ています。次いで、実測検地記録である貞享四年（一六八七）の「検地水帳」によると、田畑屋敷合わせて一一・〇一ha余（田八・

六ha、畑二・二ha、屋敷〇・一八ha)分米高九三・二石と出ている、名請人四人、屋敷数四(すべての名請人が屋敷所持)、字名は藤巻、みな瀬、むらさきの三つが記されています。

『平山日記』の貞享四年(一六八七)条には、「御知の面々」として、家具奉行毛内嘉右衛門、郷警固葛西七兵衛の二人の名が出ています。これは貞享四年の「検地水帳」の名請人加右衛門と七兵衛の二人と同一人物と思われます。

なお、『平山日記』元禄三年(一六九〇)条には、石岡村の村位は中で、庄屋は吹畑と抱き合わせで、「家数一八軒、一軒吹畑村庄屋甚左衛門、一一軒百姓、六軒水呑」と出ているように、吹畑村と共に歩んできました。

明治三年(一八七〇)、弘前藩最後の士族土着政策(帰田法)のときは、同村の寺田佐吉が二〇haの田を藩に献上した上、さらに三・一haの買い上げに応じて記念品を下賜されています。この小村から津軽地方で屈指の豪農が生まれるほど田畑の集積が進んでいたことを裏付けています。寺田家には、「寺田家日記」が所



図86 松野木川の下流(十川合流点付近)

蔵され、地方史研究に大きく寄与しています。

明治二四年(一八九一)には、戸数二八戸、人口一五一一人、馬屋二・三棟の純農村となり、さらに戦後の昭和五五年(一九八〇)には、世帯数一六八戸、人口五一一人、この内農家数四九戸(専業農家が一戸、兼業農家数四八戸)、農地は四八ha余と、純農村として発展していました。しかし、五所川原市の都市開発が進むにつれて、耕地の大半は宅地化され、石岡字藤巻の住宅街と、近年新しくできた大型商店がエルクムの街と並んで新しい発展を続けています。現在、耕作農家がほとんど残っていないということで、急速な変貌をとげています。

漆川(うるしかわ)

漆川地区は、北は津軽鉄道の線路を越えて一野坪村地区の村々に、東は水田を隔てて馬性村と飯詰村に、南は吹畑村と市に編入なつてから造成された松島町につながり、西は旧十川を隔てて五所川原の市街に接しています。

村ができた歴史を辿ると、周辺の村と同じように弘前藩の新田開発で生まれた村です。貞享元年(一六八四)の「郷帳」には寛文四年(一六六四)以降の開発村として「二五六石 漆川村」と記録されています。実際に測量をした貞享四年(一六八七)の「検地水帳」には、詳細な記録を集計して、田畑屋敷の合計八三ha、高六〇〇石と記されています。字名は玉椿、清水流、鍋掛、袖掛、浅井の

五つとなっていて、名請人が五人明記されています。このうち屋敷を持つのが二五人（なかでも甚助・権兵衛・孫九郎の三人は屋敷を二カ所も所持）、残りの二六人はこの村に屋敷を持たない人たちで、他の村からの入作農家と考えられますが、その実態はよく分かっていません。『平山日記』の貞享四年（一六八七）条に記されている「御知之面々」によると、当時の漆川村には一〇人の士分が住んでいました。このうち屋敷が二つある庄八・甚助・孫九郎を含む九人は、貞享検地帳の名請人と名前が一致します。この人たちが藩の奨励をもとに自主開発を成功させ、自分の知行地を得た人たちと見られます。さらに三年後の『平山日記』元禄三年（一六九〇）条の記録によると、漆川村は広田組に所属し、村位は下、家数二九軒（うち庄屋孫四郎、百姓一八、水呑み〓小作人一〇）と村の階層が明記されています。また、これより一〇〇年ほど後の『平山日記』天明六年（一七八六）条に、藩が有力者に対して金銭の抛出を命じたことが記録されています。この記録によると、当時の漆川村の庄屋孫四郎も、湊村、唐笠柳村、七ツ館村などの重立と共に調達米の上納を命じられ、危機に瀕していた藩財政を支える役割を務めていました。

明治九年（一八七六）の『新撰陸奥国誌』では、漆川と下漆川に分かれ、漆川村が家数一四軒、下漆川村が同二二軒と合わせて三六軒となっています。そのほかに馬生（馬性）一三軒が下漆川の枝村となっています。明治前半の行政区画変遷を経て、同二年（一八八九）に松島村の一大字となりました。

小学校は明治一〇年（一八七七）創立の吹畑下等小学の学区でした。

闇籠神社 くらおかみ 漆川字浅井四八に鎮座していて、村の守護神闇籠神を祭っています。創建は寛永二〇年（一六四三）とも明暦年中（一六五五―一五七七）とも伝えられています。寛文二年（一六六二）に再建されました。江戸時代には観音堂、飛龍宮とも呼ばれていましたが、明治六年（一八七三）に飛龍宮を現在の社名闇籠神社に改め、村社となりました。

一野坪（いちのつば）

今の五所川原市一野坪には、江戸時代にそれぞれ独立していた野坪村・独鼻村・石畑村の三村が含まれています。明治九年（一八七六）には独鼻村と石畑村を合併しました。初めに合併前のそれぞれの歴史をたどってみます。

壹野坪 いちのつば

松島地区の北西部にあり、西は石畑、北は沖飯詰の集落に接し、東方は飯詰に通じています。江戸時代前期の開発でできた新田村ですが、記録によると同じ松島村の唐笠柳村より二〇年ほど後にできました。唐笠柳村が明記されている正保二年（一六四五）の「郷帳」にはこの壹野坪の名が見当たりませんが、寛文四年（一六六四）の「郷帳」には、「千四百四石 壹野坪村」と初めて村名・石高が出ていて、近隣の村々より著しく石高が大きいのが目立ちます。

その後の貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には、飯詰組に属し、四つの字（麻の葉、馬つなぎ、あさひ田、さわらび）にまたがる田畑屋敷合わせて一〇二ha（分米九八五石八斗）と名請人六三人が明記されています。名請人のうち屋敷所持者が一四人で、残りの四九人は他からの入作いりさくと考えられます。『平山日記』元禄三年（一六九〇）の記述には、石畑村を入れて「家数四〇軒、内一軒庄屋、三五軒百姓、水呑四軒」と、村内の様子を伝えていきます。その後、享保十一年（一七二六）に独鼻村が分離独立しました。

八幡宮 一野坪字麻ノ葉三四、祭神は誉田別尊で、正徳五年（一七一五）の勧請と伝えられています。明治六年（一八七三）に太刀打稻荷神社を合祀しましたが、同八年に復社し、村社となりました。

独鼻ひらばな

開発が老野坪村より早く、正保二年（一六四五）の「郷帳」には、田舎郡の新田として狐鼻村きつねはな三五石余と出ています。貞享四年（一六八七）の「検地水帳」では、老野坪村の一部とされていますが享保十一年（一七二六）に分離独立しました。この時に狐鼻を独鼻に改めたと思われます。「寛保高辻帳」（一七四一〜四三）に三五石、宝暦九年（一七五九）の「検地水帳」には一一石余、天保五年（一八三四）の「郷帳」には一〇一石余とあります。宝暦九年（一七五九）の「検地水帳」によれば、朝日田あさひだという字名があった田畑屋敷合わせて一三・四haほどあった村でした。明治初年には戸数三戸、四方田圃に囲まれた村として記録され、明治九年（一八七六）には老野坪村に復帰したとの記録があります。現在地は通称

馬性と呼ばれる集落の東側、大字一野坪字朝日田が該当します。

石畑いしはた

南が老野坪村に、西が太刀打村に接し、東に飯詰村を遠望できる水田単作の村です。寛文四年（一六六四）以後の開発で高四五三石とあり、その二〇年ほど後の貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には、田畑屋敷合わせて三五ha・村高三一〇石と記されています。元禄三年（一六九〇）には飯詰組に属し、村位は中村で家数が百姓一〇軒と記録されています。明治の初めには家数一八軒と『新撰陸奥国誌』に記されていますが、明治九年（一八七六）に老野坪村に合併しました。

一野坪は明治二年（一八八九）以来、松島村の大字で、明治二四年には戸数一〇六、人口五七四人の村落でした。昭和二九年（一九五四）以降は五所川原市の大字となりました。

明治一〇年に一野坪小学が開設され、同一二年には男子生徒だけ三〇人で庶民教育が始められました。一野坪小学校は昭和九年（一九三四）に松島小学校の分校となりましたが同一二年には独立復帰しました。その後平成二四年に、飯詰小・毘沙門小・沖飯詰小と共に統合されて市立いずみ小学校となりました。

米田（よねた）

「まいだ」と誤読されがちな村名ですが、俵元新田の開発で誕生した当初は「生田村いきたら」でした。この村名は、当初俵元新田ができた

ときに、名前のないところが二カ所あったので郡奉行の工藤嘉左衛門が家老津輕朝負ゆきえの許可を得て名付けたと、「藩庁日記」宝永八年（一七一一）四月七日条に書き留められています。ちなみに、もう一カ所は福山村です。

その生田村が米田村に改名された理由は、広須新田に同名の「生田村」があり、混同をさけるためであると、享保十一年（一七二六）一月の「村名改称并新村創立調」に書かれています。

それから一〇年ほど後の元文二年（一七三七）の「検地水帳」によれば、米田村は田畑屋敷の総面積が約三三・三ha、同分米高一七六石となっています。さらに名請人（耕作者）が三三人で、そのうち屋敷持ちが一八人いて、残りの五人は村に屋敷を持たない人たちです。他所からの入作と考えられますが、屋敷持ちの名請人と同居して、耕作権を保有していた名請人とも考えられますが、実態は不明です。字名には八橋、月見野、田代の三つがあります。

俵元新田八カ村のうち富升村と末広村の二村は、明治九年（一八七六）に米田村に合併しました。



図87 米田稲荷神社

富升とみまき

一般には「とます」と略称され、「留升村」と書いている藩の記録もあります。松島村の東南の山際にあり、東南は長橋地区の福岡村に連なり、西は水野尾村に、北は山沿いの金山村、通称野崎に接しています。米田村など同じ俵元新田八カ村の一つで、東部の界野沢溜池から用水を引いて開発した村です。元文二年（一七三七）の「検地水帳」によると、字名は松島、八重田の二つで、田畑屋敷合わせて二二ha、村高一〇八石余、名請人のうち屋敷持ちが一九人、屋敷なしが七人でした。明治初年には戸数九戸の小村でした。明治九年（一八七六）に水野尾小学ができたときから、その一学区でした。

宝永元年（一七〇四）に開始された藩営俵元新田八カ村の一つで、享保一二年（一七二七）には「下四 末広村」と記されており、村位が下村で年貢率が四割（四公六民）と決められています。開発が終わった後の元文二年（一七三七）の「検地水帳」には、田畑



図88 松野木川と旧阿部堰の合流点にある揚水機場（水野尾ポンプ2号）

屋敷の合計一四・〇七ha余、村高八二石弱と、さらに一七人の名請人が記されています。名請人のうち一四人が屋敷持ちで、三人は屋敷無しです。明治九年（一八七六）に富升村と共に米田村に合併しました。現在は九軒の小集落となっています。

稲荷神社 米田字八橋一八三

祭神は倉稲魂命、宝永六年（一七〇九）の勧請です。安永五年八月より俵元新田八カ村の守護祈願所に指定され、明治元年まで公費によって祭祀を行っていたと伝えられています。明治六年（一八七三）に一時金山村田中の泉神社と合祭されましたが、同八年二月に復社しました。

太刀打（たちうち）

松島地区には、大字一野坪と隣り合って、大字太刀打があります。大字太刀打は、明治九年（一八七六）に合併となった富川・桃崎を含んだ村名です。

太刀打

初めてこの村の名前が出た貞享元年（一六八四）の「郷帳」には、寛文四年（一六六四）以降に開発された新田として村高五九石余と出ています。二〇年後の貞享四年（一六八七）「検地水帳」には、からたち、さわらび、馬つなぎ、あさの葉の四つの字名があり、田畑屋敷合わせて約四三haと出ています。その三年後の元禄三年（一六九〇）には飯詰組に属し、村位は中村と記されています。枝村の

桃崎を加えた家数について『平山日記』には、「庄屋一軒、百姓一二軒、水呑（小作人）一四軒」と記され、自作地を持たない小作人が半数以上を占めていることを伝えています。さらに明治初年頃には、戸数が三一戸ありました。また、枝村の尻無村と旧十川対岸の平井村（下平井町）を結ぶ渡場が置かれていたことを記しています。この渡場について、『岩木川物語』には、安永八年（一七七九）の記録として「古来より御物入り十川渡、馬船一艘 長九尋三尺・幅内法七尺・深さ一尺二寸・厚さ四寸 平井村領」と書き留められています。なお、明治一四年（一八八一）の記録には「十川 五所川原村 尻無渡 水幅二六間 民営 馬船一艘 渡舟賃金 人・二匁 馬・五匁 車・五匁」と書かれています。太刀打は明治九年（一八七六）に、桃崎村と富川村を併合し、町村制が敷かれた同二二年（一八八九）には松島村の大字の一つとなりました。

桃崎

桃崎は松島村の最北にあり、その北は沖飯詰に、南は太刀打に接し、東は水田を隔てて飯詰が、西は十川沿いの水田が遠望される村です。貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には、太刀打村の枝村として田畑屋敷合わせて三六ha余、石高二〇九石余と記され、享保一一年（一七二六）には独立しています。太刀打村の字名と同じ馬つなぎ、麻の葉、さわらび、からたちの四つの字名が基盤となっていました。元禄三年（一六九〇）には飯詰組に属し、家数一二軒はすべて水呑でした。太刀打村の庄屋の配下に置かれていましたが、明治九年（一八七六）に桃崎は太刀打村に合併しました。

とみかわ
富川

藩営俵元新田の北端にある村ですが現在は無くなっている。所在地を特定し難い村です。『新撰陸奥国誌』には「桃崎村と沖飯詰村道に対住す」と記録されているので、桃崎村と隣り合っていたようです。元文二年（一七三七）の「検地水帳」によれば、富川村には柳川、常盤の字名があり、田方九・九ha余 畑方一二・九ha余 田畑屋敷合わせて二二・九ha余 村高二〇九石と明記されています。珍しく田よりも畑屋敷が多い村でした。

俵元新田八カ村とは福山村、豊成村、浅井村、水野尾村、米田村、末広村、富升村、富川村のことで、このうち富川村だけが北方に離れています。富川村は、享保二年（一七二七）には村位が下、年貢率が四ツ成（四六六民）とされ、寛政一〇年（一七九八）には、一九一石と記録されています。明治初年の記録には、家数が二一軒で、天保三年（一八三二）に米田村の配下から独立したとも書かれています。

松島町（まつしまちょう）

昭和二九年（一九五四）に五所川原市ができてから、松島地区の水田地帯に最初にできた住宅団地です。町名もそれに因んでいます。旧十川の東側に位置する吹畑字藤巻・石岡字藤巻・漆川字袖掛の三地区にまたがっています。新住宅市街地開発法に基づいて昭和三九年（一九六四）に着工され、三年後の四一年（一九六六）九月二〇

日に竣工式が行われ、昭和四二年四月一五日に松島町（一丁目から八丁目まで）と町名が変更されて現在に至っています。初めの頃は世帯数八八八戸、人口三三七〇人でした。中央小学校・五所川原第一中学校・学校給食センターができ、保育所、郵便局、銀行などの生活環境が整備されました。

第八節 飯詰地区の地名

飯詰村は、明治二二年（一八八九）の町村制でそれまでの下岩崎村と飯詰村が合併してできた自治体です。津軽平野と梵珠山地が接する位置にあり、飯詰川が村を二分するように流れています。村は中央を通る下ノ切通しものきりどおりに沿って南北に長くできています。川の北部は台地で嘉瀬地区に接し、南部は津軽平野が梵珠山地に入り込んだ低地となっています。この低地の南方台地にも下ノ切通に沿って集落が続いていて、長橋地区の平町村たいらまちどにつながっています。さらに低地の東南には飯詰城跡があります。

村名が最初に記録されたと見られている「津軽郡中名字」（天文年間・一五三二～五四）には「飯積」と出ていますが、正保二年（一六四五）の「郷帳」以降の史料では「飯詰」となっています。飯詰村は、下ノ切通沿いの村々の中では最も大きな村に発展しました。その歴史は、平野部の新田地帯よりはるかに大分古く、中世まで遡ります。



図89 飯詰橋

飯詰組の中心地

弘前藩が始まって間もない慶長二年（一五九七）に津軽領が鼻和郡・平賀郡・田舎郡の三郡に分けられた時、飯詰村は田舎郡に組み入れられました。その七〇年ほど後の寛文二年（一六六二）には、飯詰地区は「下ノ切遣」げに属し、代官役所が飯詰村に置かれていました。ただ天和元年（一六八一）に下ノ切遣のうち六カ村（松野木川以西の姥蒨・永岡・老野坪・石畑・太刀打・沖飯詰）が、五所川原遣に組み込まれて、下ノ切遣の領域は縮小しましたが、貞享四年（一六八七）の検地後に遣が組に改称された時には、飯詰組に二六カ村が所属しました。さらに、後には藩営俵元新田八カ村も飯詰組代官所の管内に組み込まれました。

このように行政区画が時々変わりましたが、飯詰村はそのたびに梵珠山西麓に連なる村々の政治上の中心となってきました。さらに寛文四年（一六六四）には、黒石・板屋野木（板柳）・大鰐と共に領内の大場おおば（町場）に指定されて、早くから経済面でも津軽北部の拠点として繁栄を続けてきました。

『平山日記』の元禄七年（一六九四）「諸職諸家業覚」には、居鯖いさば（魚屋）二二軒、酒屋四軒、室屋むろや一〇軒、質屋二軒、鍛冶屋二軒、染家三軒、大工二軒などが明記されていて、商業都市としての一端を伝えています。

藩政初期の飯詰開発

はじめに二つの記録を紹介します。

①『飯詰村史』年表には、「慶長三年（一五九八）葛西清次飯詰を

開拓す」と記されています。本文の説明によると、葛西は羽州（秋田）の阿仁から飯詰に移住して開拓しました。その功績によって新知士（馬廻り役）に取り立てられて、津軽勤負配下の与力となった後、岩木山神社守典を勤めたと伝えられています（『大浦郷土史』を基にした記録）。

②為信が飯詰城を攻略したとき、新城の白旗野の館から応援にかけた牛之助の功績を伝える「由緒書」があります。牛之助は抵抗する狛を討ち取り、飯詰領喜良市沢目まで掌握したといえます。その功績に対して為信は、取りあえず古田高五〇石を与えて牛之助を飯積新御派奉行に任じました。天正一六年（一五八八）、牛之助は以前からの領地であった西浜城下（種里）や新城から農工商民を移住させて飯積の開発を成功させたことを報告したところ、翌年掘越城に召されています。以後、為信に重く用いられました（「阿部勇藏家由緒書」）。

牛之助とは、為信の飯詰城攻略に功績のあった阿部孫三郎信友のこと、後に俵元新田を開発した阿部亦右衛門の先祖に当たると伝えられる人です。

紹介した①②によって、飯詰村が初代藩主為信の初期から開発されてきたことが分かります。特に②は飯詰の開発が、中世の飯詰城攻略と深く関わっていたことを伝えています。

山林業

飯詰地区は、藩政時代から明治以降の営林署時代にかけて、梵珠山地を背景とした藩有林・国有林が村人の生業と深く関わっています。

した。育苗・植林から山守・伐採・運搬・貯木・製材・炭焼き・焚木取り等々です。

次は、『飯詰村史』に見える山林関係の記録の一部です。

貞享三年（一六八六）二月に、飯詰村に山守（役人）を置き、以来継続配備しています。

元禄一四年（一七〇一）、狐野（坂の上）に初めて松を植えています。その後も宝永五年（一七〇八）に飯詰の仁兵衛・太兵衛らが飯詰山や二ツ森に松を植えています。

享保八年（一七二三）一二月に平町の百姓が盗伐の罪で村追放の罰を申し渡されています（植林関係は以下省略）。

宝暦一三年（一七六三）に、山林御見分帳を作っています。

寛政四年（一七九二）七月には、飯詰に山役所を設置しています。

文政二年（一八一九）には新岡仁兵衛ら五人が、抱え山証文を渡されています。抱山は私有林、証文は藩から所有者に下付され、売買自由の許可証です。

天保三年（一八三二）には抱山の御元帳を作りました。

明治一九年（一八八六）、飯詰小林区署を設置しています。

その他の特徴

文化面では、飯詰出身の内海草坡を忘れることはできません。

寛政初期から、弘前で俳諧の指導普及に努め、多くの俳人を育てた人です。法林寺境内に「灯り見えずなりて音ある芒かな」の句碑が建てられています。

飯詰村は、明治以後も近隣地域との強い繋がりが続きました。

大正一四年（一九二五）には五所川原町民の飲料水を確保する飯詰浄水場の起工式が行われ、昭和五年（一九三〇）には津軽鉄道の飯詰駅が開業しました。同九年、油川に通じる自動車運行が開始されたこと等も、その一例です。

飯詰（いづめ）

明治三二年（一八八九）に飯詰村が誕生したとき、村役場が飯詰村の中心に設置されました。飯詰という村名の由来については、色々な説が識者からも提示されてきました。『飯詰村史』に記されている中から二つ紹介します。

①アイヌ語で見晴らしのいい景勝地を「イツミ」と呼ぶことから、



図91 飯詰浄水場



図90 内海草坡句碑

これと関わらせて「飯積村」としたという小谷部博士の説です。
②古い名の飯積から、飯を山の如く積むという富貴のイメージと結びつけて、飯を腹一杯詰める「飯詰」を「前途を祝福する佳名である」という『飯詰村史』の著者福士貞蔵の説です。

藩政時代の開発

弘前藩が新田開発の成果を幕府に報告した最初の記録といわれる正保二年（一六四五）の「郷帳」には、「飯詰村 四百六十六石七升」と記されています。同村の後の記録に比べるとはるかに小さい石高ですが、下ノ切^{シノキ}だけでなく、同じ田舎郡一二〇カ村の中でも、飯詰村に匹敵する石高の村はごく少数で、この地方では目立つて大きな村でした。この成長が二〇年後の寛文四年（一六六四）に大場（町場）に指定された基になったと考えられます。

新岡七左衛門の開発

『新岡累代日記』には寛文元年から一二年（一六六一〜七二）にかけて、田方二五町歩、畑方八町五反（場所は白旗・清野・盛越・皆瀬・石田）を開発したことが記されています。新岡家は、藩祖為信が大垣攻め出陣中（慶長五年・一六〇〇）に起こった重臣の反乱を鎮圧した功績で重臣に列せられた金小三郎の子孫に当たります。後に藩主の継承問題に関わって主流からはずれ、改姓して飯詰に移住したと伝えられています。七左衛門の開発はその後も続けられました。貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には、飯詰村の生産力が、次のように集計されています。

田方 一四三町七反二畝二歩 分米一二九〇石五斗一升三合

畑方 四六町四反八畝二三歩 分米 一六一石三斗五升八合

計 一五二町七反十歩 分米一四五一石八斗

(屋敷は、畑方の中に含まれています。字名は、みなせ・清野・狐野・沢田・桜田・かけひ沢・石田・森越・白幡の九つ)

およそ四〇年前の正保二年の「郷帳」に比べると、石高が三倍以上と著しい向上を示しています。両記録の調査方法の相違を考慮せずに、単純に比較することはできませんが、それにしても、この間の開発の大きな進展は否定できませんでしょう。

朝日沢

飯詰地区南東部にあり、飯詰城の東麓にできた小集落です。普通は「朝日」と呼ばれて、飯詰村の枝村とされてきましたが、その歴史は古く、中世飯詰城の外郭、朝日館跡^{あさひだてあと}にできた村で、三重の壕跡や中世遺物が残っていたと伝えられています。

寛文四年(一六六四)の「郷帳」に「朝日沢村 一六七石」と記されていることから、明暦(一六五五〜五七)前後にできた村と見られています。

朝日沢の村名由来は、飯詰本村の西部にある影日沢^{かげひさわ}に対する地名として付けられたと伝えられています(『飯詰村史』)。

貞享四年(一六八七)の「検地水帳」には、次のように記されています。

田方 七町五反五畝二九歩 分米 五九石五斗三升九合、

畑方 一町八反五畝二八歩 分米 五石三斗一升一合

大坊

飯詰の幹線道路から東の興隆^{こうりゅう}の方に五〇〇m程に進んだ小高い丘(いまはリング畑)にあった村です。「天和の書上帳」添図に「八幡宮地一〇間・一〇間」や「大坊村」の文字が明記されています。また、郷社八幡宮の縁起によると、寛保年中(一七四一〜四三)に「大坊村、残らず飯詰へ引つ越した」と記録されています。大坊村についての縄張り調査によって、飯詰城の枝城のようなタイプの館跡と見られています。

味噌ヶ沢

飯詰本村の長坂集落から北方の沢目にあった村で、明暦元年(一六五五)の開拓村と伝えられていますが、その由来は不明です。村名は、村にある土盛を古墳とみなして味噌ヶ盛と呼んできたことに因んでいると言われますが、発掘調査で確かめられた記録はないようです。この村の北端にある范ノ沢溜池は、飯詰ほか松島・中川・嘉瀬等の旧村地区にも及ぶ水田五二四町歩を灌漑^{かんがい}する重要な用水池でした。明治四四年(一九一一)四月五日に、この堤防が決壊して大事故となりました。死者四名・流失家屋一五戸・浸水家屋五〇戸・埋没田及び耕作不能田五〇〇町歩・堤防決壊水路破損など、被害総額四万二五二四円と記録されています。修築された堤防には、慰霊と再発防止の記念碑が今も建っています。昭和四九年(一九七四)、住民が下岩崎に集団移住したため、廃村^{はいそん}となりました。

飯詰高楯城跡

飯詰の村を縦断する下ノ切通の南東部にあって、津軽平野北部が

一望できる標高五六・七mの小高い山の一角が、地元で「高楯城」と呼んできた中世の飯詰城跡です。北側の急な崖がけに沿って糠塚川ぬかづかがわが流れています。その北に広がる細長い平地（水田）の方角からみるといかに城跡らしい景観ですが、この古城の時代や城主については、同時代史料が全くないため確かな記録による詳しい歴史は明らかにされていません。

城主については、「飯詰村に山城有り、館主を朝日左衛門尉さへもんゑいという。一説に朝日佐殿ともあり」と「津軽編覽日記」の一部分が引用紹介されている程度です（『青森県史 資料編 孝古4 中世』）。しかし、これも確かなことは不明とされています。

一方、文書記録とは別に、採集陶磁器と縄張図による研究が一定の進展をしています。

これまで地元五所川原の研究者によって採集された遺物の研究から分かっていたこととして、浪岡城跡との関連が指摘されています。「採集された陶磁器の組成は浪岡城の出土品と類似し、年代も一五〇一六世紀と重なる。さらに、飯詰城は、浪岡から飯詰を経由して小泊に至る近世の『下ノ切街道』における要衝の地にあることを考慮すると、浪岡城及び浪岡北畠氏との関連性が示唆される」との見解が示されています。

飯詰地区の通称名

南新 なんしん 飯詰城の北西にあたる南新派立の略称です。『飯詰村史』によると三六〇年位前にこの付近が開発されたとあります。

北新 きたしん 南新の北方につらなる開拓地で北新派立のことです。昭和四

八年（一九七三）に農免道路が開通してから、松島町とつながり、活況を呈するようになったといわれています。

仲町 なかつちょう 北新地区の北方に接しているこの町の北西には下町が連なっていました。以前は郵便電話局や劇場・商店でにぎわった町だったと伝えられています。

下町 したまち 飯詰橋の南方一体で、かつては多くのカヤ屋根が城下町の面影を残していたと伝えられています。

大町 おおまち もとは伝助町の一部でしたが、戸数が増えたために飯詰駅通りに新しくできた町です。

新町 しんちょう 下町あたりから松島地区の一野坪通りに通じる道路に沿って新しくできた町です。

伝助町 でんすけまち 人名がついた町名です。伝助は飯詰城下の下岩崎に置かれていた分館の主で、北の守りに任じられていたアイヌの酋長でした。ところが、本城の城主朝日氏に背いて処刑されたという伝承が伝えられています。この伝承と町名との関係は、調査による説明が行われたことがなく不明です。

上町 うへまち 飯詰橋の北部から、寺町にかけての地区で、藩政時代には飯詰組代官所があった町です。

寺町 てらまち 法林寺・長円寺・大泉寺の三寺が並び一目で町の名が浮かぶ町です。

下村 したむら 上町の西に続く町で、西向きしたむらの緩やかな傾斜を下ると飯詰川にさしかかります。

南下派立 みなごもはだち 旧小泊街道に沿った開拓地で、北には中下派立が続いています。南は下村と寺町に接しています。



図92 飯詰地区の通称名

中下派立 南下派立の北に続き、小泊街道に沿った開拓村です。東

は大日町に続いています。

北下派立 南・中・北と続く下派立の北端にあり、東部は五本松に接しています。

五本松 小泊街道の北端に開拓された畑地に覆われた集落です。

大正町 地元では、「影日沢を略して当町を大正町と云う」としていると言われています。

大日町 大日如来を祭る神社に因んだ町名です。寺町の北に接して、金木・小泊に通じる県道と不動公園・青森の油川に通じる通りの分岐点にあります。

長坂 戦後樺太や朝鮮からの引揚者が大淵開拓組合に結集して味噌ヶ沢地区を開拓した人々の居住地です。長坂地藏尊がある賽の河原でも知られている町です。

曙町 いずみ小学校の北側にある集落で、昭和十一年（一九三六）から人が住みついていましたが、昭和二十二年（一九四七）から曙町と呼ばれるようになりました。

興隆 満蒙開拓者が戦後帰国して山林原野を開拓して築いた集落です。電灯もない不自由な生活に耐えながら、畑作中心の開拓を続けてつくった集落です。昭和二十七年（一九五二）四月に開校された興隆分校（一年～三年）は昭和三五年一二月で閉校しました。

坂の上 南新派立の坂の上にある集落の通称です。

（飯詰地区住民協議会編集『いづづめ』）

飯詰の寺院と神社

大泉寺 浄土宗の古寺で明暦元年（一六五五）青天和尚が創立したと寺の縁起に書かれています。慶長十一年（一六〇六）創建説もあります。寺男を務めた江良五郎兵衛（つがる市出崎）が後に開墾に成功した報恩に寺鐘を寄進したと伝えられています。

長円寺 曹洞宗、創建は記録によって違いがあり不詳です。『飯詰村史』には、寛文七年（一六六七）七月に寺号を許可されたと記されています。弘前長勝寺とつながる沈鐘伝説や軍事徴収に応じた鐘として広く知られ、昭和三七年（一九六二）に県重宝に指定されました。

法林寺 寛文八年（一六六八）に念仏道場（庵）として創建され、延宝八年（一六八〇）に寺号を免許された真宗大谷派東本願寺の末寺です。数ある寺宝の中に松島地区の金山大溜池開削の際に出土したという阿弥陀如来木像があります。境内にある俳句師匠の内海草坡句碑は、飯詰の後輩の俳人たちが建てたものです。

妙龍寺 日蓮宗、昭和十一年（一九四一）にそれまでの日蓮上人を宗祖と仰ぐ寺院再興事業を受け継ぎ飯詰



図93 長円寺の鐘（県重宝）

結社と改め、津軽随明師を担任教師とし、同二年（一九四七）工藤随源師を住職とし寺号を高楯山妙龍寺と公称しました。境内には日蓮上人の立像が高楯城を背にして建っています。

大日如来 寺院のような神社名ですが、明治初年の神仏分離以後も大日如来を祭神としています。場所は飯詰字影日沢、不動公園・飯詰ダム通りと五本松通りの分岐点にあり、宝暦二年（一七六二）の建立とされています。

八幡宮 飯詰字福泉一四八 飯詰橋から寺町に通じる道路の東側に朱色の大鳥居があります。境内はこの約一〇〇mほど奥にあり、社殿は南向きに建っています。祭神は、誉田別尊・天照皇大神・軻遇突智命の三柱ですが、詳しい由緒沿革は不明とされています。この神社は初め大坊村に建てられました

が、創建者の大坊館主・樺沢団右門の没後、寛保年中（一七四一～四三）に大坊村が飯詰へ移転となり、宝暦元年（一七五一）飯詰愛宕神社に遷座となり、安永三年（一七七四）には飯詰組二七村の祈願所に指定されました。以後、飯詰組の守護のため、毎年六月に公費で祭祀を行



図94 飯詰八幡宮本殿

うことになりました。さらに、明治四年（一八七一）には愛宕神社を八幡宮と改称しました。また、翌五年には飯詰村別社神明宮を合祭し、さらに同六年四月には白山姫神社をも合祭し、郷社に列せられていきます（白山姫神社は同八年に復社）。さらに平成六年一月一日には、本殿が県重宝となり注目されています。

稲荷神社 飯詰高楯城跡西方の坂道途中に朱塗りの大鳥居があり、大晦日恒例の裸祭りでも広く知られている神社です。宝暦二年（一七六二）に建てられた記録がありますが、もともとは高楯城の館神であったとも伝えられています。

神明宮 創建年是不詳ですが、延宝三年（一六七五）に再建された記録があります。明治五年（一八七二）には八幡宮に合祀されましたが、昭和二八年（一九五三）に独立しました。

二ツ森 飯詰城跡西方を通る下ノ切通の坂を上ると、坂の上（通称）の集落に至ります。この集落の南端には「二ツ森」という小高い丘があり、南東に開けた野原は昭和初期まで草競馬場でした。この競馬場の歴史は古く、寛延二年（一七四九）に相馬吉右衛門がここに馬頭観音を建てたことに因んでこの頃から馬乗り（競馬）あったとみられています。また、原子城や胡桃館にも馬場があったことから、二ツ森の競馬場も飯詰城時代と結びつけて見られている面もあります。昭和初期からは戦争で、戦後は農耕の機械化による飼馬の減少でかつて賑わった草競馬の面影は消えてしまいました。

天池 いずみ小学校の裏通りから四kmほど梵珠山に進んだ山道のほとりにある小さな池です。



図95 天池



図96 天池神社

飯詰地区をはじめ近隣の農村では、田畑に用水が足りなくなると飯詰の天池に雨乞いの願をかけるという慣わしがありました。ここに願をかけると、不思議なほど雨がよく降ることと、この池には浮島があつて、風にふかれて場所が変わることとで評判でした。

雨乞いだから「雨池」と書くのが当然と思われませんが、「尼池」とも「天池」とも書かれています。

「尼池」は、一心不乱に鉦を叩いて雨乞いの祈りを捧げていた一人の尼僧の伝説に因んでいます。夜明けに尼僧の姿が消えた跡に満々と水を湛えた池ができていたので、村の長老の教えをもとに、新しい祠を建てて雨乞いの末に亡くなった尼僧を祭るようになったと言われています。

「天池」は、雨乞いの度ごとに願いが天に届いてよく雨が降るところから来た言葉で、今も「天池神社覚書」と神社の献額に書かれています（『わが街 いいづめ』）。

不動公園と飯詰ダム

飯詰から青森の油川に通じる県道の途中に、不動の滝を源流とする「不動ため池」という大きなため池がありました。昭和一三年（一九三八）から戦後の昭和二七年まで、ため池の工事が行われましたが、昭和四二年から新たに多目的ダムとして「飯詰ダム」が着工されました。多目的とは、五所川原上水道の広域給水と下流の水田灌漑の二つで、昭和四八年（一九七三）九月に完成し、風光明媚な休養地ともなっています。油川に通じる道路も整備され梵珠山を横断する主要な道路となりました。ただ、この山道は冬期間閉鎖されること、また不動の滝への道が現在危険で不通となっていることに留意を要します（『わが街 いいづめ』）。

飯詰小学校

明治八年（一八七五）九月一五日に飯詰小学が創立されました。当初、校舎がなか



図97 飯詰ダム

ったので、塾を開いていた松野伝宅と八幡宮の拝殿を教室とした開校でした。その後福泉に校舎ができ、村や地域の支援をもとに次第に生徒数が増え充実発展してきましたが、平成二四年三月三十一日をもって閉校しました。一三六年に及ぶ歴史の年表から特徴的なことをとどめておきます。

昭和二〇年（一九四五）七月五日に、東京都渋谷区明和国民学校（現鳩森小学校）の集団疎開（児童四四名、職員六名）を受け入れています。一行は同年八月一日の終戦から二カ月後の一〇月一日まで滞在しました。両校の交流は戦後も続き、今も地域の話題になっています。

昭和二三年二月二日、体操場よりの出火で校舎が全焼したため、三寺院（大泉寺・長円寺・法林寺）に分散して授業を続けました。それを契機に、新校舎を現在地の石田一八四番地に新築しました。石田校舎に移ってから、昭和三〇年（一九五五）二月七日と平成五年六月一九日にも校舎が焼失しました。

昭和二七年四月、興隆の開拓集落に興隆分校（一〜三年だけ）を開設しました。同三五年一二月の廃止まで九カ年近く興隆分校が続いていました。（飯詰小学校閉校記念誌「けやき」）

平成二四年三月三日で閉校となり、その跡に同年四月一日、市立一野坪小学校・同沖飯詰小学校・同毘沙門小学校と本校の四校が統合して五所川原市立いずみ小学校が創立されました。

飯詰中学校

昭和二二年（一九四七）の学制改革で創立された飯詰村立の新制

中学校です。場所は石田地区で、飯詰小学校の南側に建っていました。以前からあった県立中学校と区別するために、どこでも「新制」の二字をつけて呼んでいました。終戦間もない混乱期でしたから、創立の当初は校舎がなく、どこでも小学校の教室や公民館・寺院などを借りて仮教室で授業をしました。

飯詰中学校は、飯詰村が五所川原市となつてからも同じ場所が続いていましたが、昭和五九年（一九八四）四月一日から中川中学校と統合して、五所川原第四中学校となり現在地に新設されました。**東北職業能力開発大学校附属青森職業能力開発短期大学校（ポリテクカレッジ青森校）**

昭和四四年（一九六九）に雇用促進事業団によって国立五所川原総合高等職業訓練校が飯詰地区南端の県道東側に設立されました。平成一二年から、東北職業能力開発大学校附属校として、生産技術科・制御技術科・電子技術科、情報技術科の四科を開設しています。

下岩崎（しもいわさき）

下岩崎は、明治二二年（一八八九）の町村制で飯詰村と合併して新しい自治体の飯詰村を構成した村です。昭和二九年（一九五四）に五所川原市に合併後、大字下岩崎となりました。この集落の始まりについては、明らかではありませんが、正保二年（一六四五）の「郷帳」に「六十八石八斗五升 下岩崎村」と明記されています。

貞享四年（一六八七）の「検地水帳」には次のようになっています。

田方 四六町七反七畝二歩 分米 四一石八斗

畑方 一三町五畝二八歩 分米 六一石二斗三升七合

田畑計 五九町八反三畝歩 分米 四七二石三斗一升七合

右の記録にも、下岩崎における開発の進展が表れています。

『飯詰村史』などによると、最初は岩村でしたが、貞享四年（一六八七）に岩崎と改められました。さらに西海岸の岩崎村との混乱

を避けるため享保十一年（一七二六）に下岩崎村と改称されました。
愛宕神社 あたご 下岩崎の下ノ切通と中柏木に通じる山麓の県道の間にあ

ります。建立年は不明ですが、宝永二年（一七〇五）再建と伝えられています。飯詰八幡宮との合祀や移転の複雑な経緯を経て、天保

一五年（一八四四）の頃に村人によって建て替え

られ、明治三年（一八七

〇）の一社一社政令で今の所に移されました。

下岩崎には中世の古い

館跡があったと伝えられています。今も杉林の縁

に沿って堀跡があり、五

〇年ほど前に土器片が出てきたことも伝えられています。しかし、これら

については『五所川原市



図98 下岩崎愛宕神社

史』刊行の際の調査で、堀跡も土器片も中世の館に関係したのではないことが明らかにされました。『飯詰村史』で「二重濠が歴然としているから館のあったこと間違いがない」と書かれたことに疑問が残されています。

第九節 中川地区の地名

江戸時代初期、寛文五年（一六六五）から延宝四年（一六七六）にかけて、弘前藩は五所川原新田の開発に力を注ぎました。

『津軽平野開拓史』によれば、その際藩は、家財や食糧給与等の優遇策を打ち出して盛んに開拓民を募集しました。これに応じ、現在秋田・秋田谷・山形・加賀谷・越後谷・能登等の姓を名乗る方々の先祖が生国を離れ、はるばると津軽の地にやってきました。

難工事をものともせぬ多くの人々の努力のおかげで、新田一五カ村が誕生します。その中に、本地区西側の長橋、新宮、砂持場（砂持庭とも、のち種井）、田満館（のち田川）、長渡浪（のち川元）、左組（のち赤堀）の六カ村も含まれます。

本地区東側の沖飯詰、桜田、川山はそれ以前に村が開かれており、沖飯詰から二つの村が分村したとあります（『青森県租税誌』）。

元禄四年（一六九一）には弘前藩の直営工事である五所川原堰（現藤崎町の平川右岸より取水）が完成しました。これにより鶴田、五所川原、中川、三好の約一三〇〇町歩の水田を潤しました。

江戸時代後期の「鶴ヶ丘（岡）川山菴之新開申立之図」（図115）には、大川（岩木川）と十川、五所川原堰、阿部堰、藻川堰等が水色、中川・三好地区の主な村々が赤い丸、道路は黄色で描かれています。

明治九年（一八七六）の『新撰陸奥国誌』「五小区地理図」には、大川（岩木川）右岸に、南から田川・河本・赤堀・高瀬・鶴ヶ岡・上茂川・下茂川、そして今はない成戸の各村が続きます。さらにそ

の北で十川が大川に合流します。また、十川左岸に新宮・長橋・下長橋・種井・福井、右岸に川山・沖飯詰・桜田の各村が見えます。

明治二年（一八八九）、市制町村制の施行により、北津軽郡川山村、沖飯詰村、桜田村、種井村、田川村、新宮村、長橋村の七カ村が合併し生まれたのが中川村です。役場は川山にありました。

中川村は、東北は飯詰村と嘉瀬村毘沙門、西は三好村、東南は松島村、南は五所川原町と接していました。西南は岩木川に沿い、川向こうは西津軽郡川除村でした。なお、村の形は「右向きの馬の胸像」に似ています。

村名の由来は、『五所川原市総合沿革史』によれば、「合併村ノ中央ヲ横流スル十川アルヲ以テ之ヲ名ヅク」とあります。

現在、本地区の中央を旧十川が東南から北西に流れ、岩木川に合流します。土地は平坦でよく肥え、水の便も良く、広大な水田地帯



図99 中川地区 旧十川と津軽自動車道「五所川原西バイパス」の工事（上中泊橋より南を望む）

が広がっています。

しかし、困ったことに、

かつては春の雪解けの頃などには両河川が氾濫し、洪水となつてたびたび村々を襲いました。水害を防ぐと、藩政時代から何度も河川改修工事等が行われ、徐々に改善されてきました。水との長い戦いは、昭和四〇年代まで続きました。

昭和二九年（一九五四）、一町六カ村が合併して市制施行し、五所川原市がスタートしました。昭和五五年（一九八〇）には、新宮団地の造成に伴い、新宮、長橋の南側が、若葉一・二・三丁目目に変更されました。平成二六年三月末の当地区の世帯数は一六二六、人口は三八六七です。

川山（かわやま）

東は沖飯詰、西は長橋（中泊）と種井、南は太刀打、北は毘沙門と接しています。かつては中川村の役場所在地でした。地区の北部は水田、南部は主として蛇行する旧十川沿いに集落が形成されている



図100 旧十川河川公園の看板（かつての流路）

ます。県道沖飯詰五所川原線は、集落の中央を走る幹線で、旧十川を越え、長橋（中泊）、南の若葉や新宮方面につながります。

大正一三年（一九二四）発行の小冊子『青年の杖』では、村名の由来として、「川の岸が非常に高く、小山のようであったため川山と呼ばれるようになった」とする説や「当時萱が一面に繁茂していたところより萱間と言われていたのだが、後に川山に改められた」とする説などを紹介しています。また、延宝年間（一六七三〜八〇）、藤森三郎右衛門が初めに村を開いたとしています。その後、吉岡家が越後より、秋田家が秋田より移り住んで、村が形づくられていったようです。

天和三年（一六八三）、下ノ切遣しものきりけんに属して河山村と称し、貞享四年（一六八七）には広田組に属し、同年の「検地水帳」では田畑計五四町、村高二七一石で、元禄三年（一六九〇）の家数は三六軒でした。天保五年（一八三四）の「郷帳」によれば、六一八石まで増やしています。

明和六年（一七六九）、対岸の種井とを結ぶ渡わたがありました。かつては旧十川が現在より西寄りを流れていました。明治九年の『新撰陸奥国誌』には、「渡々本村の中程より下長橋村にわたる通路なり幅一二間水常平深六尺」とあります。また、「家数八〇軒、本村の北に嘉茂助沢及び川山沢と呼ばれる広い沼沢、葦沢が広がり、猿毛さげ即ち泥炭を採って民用とす」とも記されています。なお、サルケは乾かしたのち燃料として売られ、農家の夏の小遣い稼ぎになったとのこと。このうち、嘉茂助林は江戸時代には鷹待場たかまちばやしでした。

明治一二年の人口は五四五でした。

明治二〇年（一八八七）、旧十川に架かる中泊間の橋が完成しました。初めは松井橋、後に時の北津軽郡長が「開運橋（かいうんばし）」と命名しています。

神明宮は、安政三年（一八五五）の「神社微細帳」によれば、創建は不詳、元禄二年（一六八九）に村中で再建したとあります。

明治一四年（一八八一）、川山小学校が創立されました。同一七年に沖飯詰、川山、桜田の各小学校が統合し、学区の広い沖飯詰小学校が始まりました。

また、中川中学校は沖飯詰小学校併置から離れ、昭和二五年（一九五〇）、字千本に新校舎が建設されました。三〇余年の歴史を重ね、昭和五九年（一九八四）に閉校しました。その間、二七〇三名の卒業生を送り出しました。それを引き継いだ五所川原第四中学校は、平成二五年に統合三〇周年を迎えています。

字名として、森内（もりうち）、甘木（あまき）、千本（せんぼん）があります。集落があるのは森内で、道路が網の



図101 川山神明宮

目のように入り組んでいるのが特徴的です。町内会名は川山です。現在、旧十川のかつての河道に沿って延々と旧十川河川公園が整備されています。地区住民のいこいの場となっており、対岸の長橋（中泊）とともに広々とした空間をつくりだしています。平成二六年三月末の世帯数は二二六、人口は五五二です。

沖飯詰（おきいづめ）

東は飯詰、西は川山、南は太刀打（桃崎）、北は桜田と接しています。南部は飯詰川が形成した扇状地の末端、北部は自然堤防上に立地します。周囲は平坦な水田地帯です。地区の中心を国道三三九号が南北に、県道・市道が東西に貫きます。集落はこれらの道路の両側に続いています。

字男鹿（おしか）に所在する五所川原第四中学校の西に、ひときわ目を引く樹齢四五〇年の黒松があります（市指定名木）。標柱には、「寛永一六年（一六三九）、大洪水により飯詰村（溜池の破損、



図102 沖飯詰の黒松

人家流出(二六軒)より流れ着いたものといわれ、『沖飯詰』の地名もこのことにちなんで命名されたと伝えられています」とあります。『五所川原市史年表』には、同年「大洪水、原子村より下通り金木村まで破損、用地残らず泥に埋まる。前代未聞の洪水」と記されています。

村祖として、寛永一二年(一六三五)、神弥左衛門が三〇石、正保二年(一六四五)には藤原(のち白戸)貞親が三〇石を開発しました。また、同じ頃に、秋田八郎左衛門が村を開いたとも伝えられています。

沖飯詰村は、正保二年(一六四五)の「郷帳」に一三四石と見える古村の一つです。また、慶安二年(一六四九)、下ノ切通の脇道として「飯詰より沖飯詰まで廿町(約二・六km)」とあり(『五所川原市史史料編2 上巻』)、飯詰村とのつながりの古さがかがえます。



図103 八幡宮の鬼コ

『青森県租税誌』によれば、同村より桜田と川山が分村したとあります。下ノ切通のち五所川原遣に属していました。貞享元年(一六八四)には一一六九石、貞享四年には広田組に属し、同年の「検地水帳」では田八五町、畑八町余、村高七一・二石ほどでした。元禄三年(一六九〇)、桜田村と合わせた家数は三四軒でした。天保五

年(一八三四)の「郷帳」によれば、七六九石と他の村を引き離していました。明治九年(一八七六)の戸数は五六、人口三八五でした。

字帯刀にある八幡宮は、創建は不明ですが、明暦元年(一六五五)に村中安全のため再建されました。現在鳥居には真っ赤な鬼コがまつられ、にらみをきかせています。

明治九年(一八七六)、沖飯詰小学校が設立されました。同一七年に桜田、沖飯詰、川山の各小学校が統合されて沖飯詰小学校となりました。その後、簡易、尋常、国民小学校と改称し、昭和二年(一九四七)、新制沖飯詰小学校が誕生しました。平成二四年、一三〇年余の歴史を重ねた同小学校は、一野坪小学校・毘沙門小学校・飯詰小学校とともに四校が統合されて、いずみ小学校に生まれ変わりました。また、昭和二二年(一九四七)、同小学校に併置する形で中川中学校が開校しました。同二五年には川山へ校舎を新築移転させました。

現在、地区東のこめ米ロード、西方の津軽自動車道へのアクセス道路五所川原北バイパス(一部工事中)開通により、車の流れが変わってきています。川山との境には、JAごしょつがるのカントリーエレベーターが高くそびえています。どこからでもよく見え、平坦な付近一帯のランドマーク的な役割を果たしています。字名として、鴻ノ巣、霞、男鹿、帯刀があります。町内会名は沖飯詰です。平成二六年三月末の世帯数は一九五、人口は四二二です。

桜田（さくらだ）

東と南は沖飯詰、西は川山、北は毘沙門と接しています。集落は沖飯詰から続く自然堤防上に立地し、平坦な水田地帯に囲まれています。地区の中心を国道三三九号、東をこめ米ロードが南北に貫き、北部の毘沙門との境でほぼ垂直に交わっています。

飯詰川はこれまで流路を大きく変えています。かつては桜田と沖飯詰の間に流路があり、のちに桜田と毘沙門との間を流れていました（※詳細は、第十一節を参照してください）。

寛文四年（一六六四）の「郷帳」に、この辺りの古村である沖飯詰村に次いで桜田の名が見え、村高は二〇六石でした。『青森県租税誌』によれば、川山とともに沖飯詰から分村したとあります。

地名の由来については、はっきりとしたことは分かりません。『青年の杖』では、白取左右衛門が飯詰の高楯城近くの桜田から移り住み、そのため「桜田」と名付けられたのではないかとする説を紹介しています。また、草分けとして他に、



図104 桜田を貫く国道339号（南より）

笠井長五郎が新宮から移住したともあります。

『アイヌの滅亡と津軽の変遷』によれば、慶安年間（一六四八～五一）、桜田には藩の小知行と呼ばれる下級武士が大量に入植したとあります。また、著者蛸島長三郎の回想として、「農家の田植えが終われば、どの村でも虫祭りや馬に乗った殿様、荒馬、農具に色紙を張り、藁の大虫小虫で村を練り歩いたものです。この時、刀と袴が無い村がたくさんあったのですが、士族許りの桜田の村だけは槍を持ち、陣笠、袴を着けたさむらいの行列が通り、子供のころは怖かった」こと等が記されています。他の村々とは異なる事情があったようです。

天和三年（一六八三）には下ノ切遣に属して桜庭村と称し、貞享四年（一六八七）には広田組に属し、再び桜田村に戻しています。貞享四年の「検地水帳」では田一四町、畑二町、石高は九九石でした。元禄三年（一六九〇）、沖飯詰村と合わせた家数は三四軒でした。元禄一年、岩木川の洪水により田七町歩が冠水したとあります。その後、開発は進み、天保五年（一八三四）の「郷帳」によれば、一五六石にまで増えています。

明治二四年（一八九一）には戸数は四八、人口三一七、厩四〇との記録があります。

地区北西部に所在する鴻の巣遺跡からは、平安時代の須恵器の長頸壺が一個体、土師器の破片が発見されています。

明治一三年（一八八〇）に鹿嶋神社を建てて、それ以前の毘沙門稻荷神社の氏子から独立しました。その際、後に初代中川村長とな

る笠井運吉郎が一五〇坪の土地を寄付したそうです。境内は現在も手入れが行き届いています。

同じく明治一三年、桜田小学校と沖飯詰尋常小学校が統合し、桜田小学校が開校されました。

明治一七年（一八八四）、桜田小学校は川山小学校とともに沖飯詰小学校に統合されました。

字名は鴻ノ巢のみです。沖飯詰の字鴻ノ巢のちようど東側に当たります。町内会名は桜田です。平成二六年三月末の世帯数は五五、人口は一四四です。

種井（たねい）

東と北は旧十川を挟み長橋（中泊）と川山、西は高瀬、南は田川と接しています。地区の西方を岩木川、北東を旧十川が北流します。中泊・川山方面とは、旧十川に架かる種井橋および下中泊橋で結ばれています。集落は、旧十川左岸の自然堤防上に立地しています。地区の東側には熊野宮を中心に南北方向に家並みが形成されています。西側は水田が広がっており、田川からはほぼ直線的に北流する赤堀放水（以前の旧十川の一部）により、西端は区切られています。



図105 桜田 鹿鳴神社

地名の由来については、はっきりとしたことは分かりません。ただ、『青年の杖』によれば、「種井は、川山の菴にして蒲派立という所」とし、「天明の大飢饉（一七八三〜八四）の際、この地が大火となり、その火熱のため空気暄暖となり、霜の害を免れ、上作を得た。翌年、弘前藩主に種もみを献上したところ、種村と名付けられた。その後庄屋が井の字を加えて種井になった」と伝えていきます。また、『アイヌの滅亡と津軽の変遷』では、「種井は三〇〇年ばかり前にできた村で、毎戸に井戸を掘ったが、その際に赤土を通った良い水が出た家が三軒より無く、それで村名を種井と名付けた」としています。

ただ、村が開かれたのはそれよりも百年以上も前のようです。寛文五年（一六六五）には赤堀村（現田川）の川村作兵衛がこの地を開発し、藩より四〇石下されました。また、延宝年間（一六七三〜八〇）、奈良岡弥五左衛門が村を開いたとも伝えられています。その他、弘前の館山藤十郎、藻川の高橋権三郎の名も見えます。

種井村は、寛文五年（一六六五）から延宝四年（一六七六）に開かれた五所川原新田一五か村の一つです。天和三年（一六八三）には五所川原遣に属していました。それまでは砂持庭（または砂持場）村と呼ばれていましたが、貞享四年（二六八七）種井村と改めら



図106 熊野宮の鬼口

れ、広田組に属していました。貞享四年の「検地水帳」では、村高は一五四石、田二〇町、畑六町余でした。元禄三年（一六九〇）の家数は一二軒でした。元禄十一年、岩木川の大洪水により田三町歩が冠水するという被害に遭っています。下って明治初年には、家数は二六軒に増えています。

なお、『青年の杖』によれば、江戸時代の種井には旧十川の渡があり、対岸の川山とを結んでいたとされています。現墓地の辺りに渡船場と渡守の小屋があったようです。川の流路が現在とは異なっていたことがうかがえます。

熊野宮の創建時期は不明ですが、延宝五年（一六七七）に再興され、熊野之宮と記録されています。鳥居には鬼コがまつられています。このケヤキはかつて市の名木に指定されましたが、現在は残念ながらありません。

字名として、山野辺、鏡濁があります。町内会名は種井です。平成二六年三月末の世帯数は三二、人口は九四です。

岩谷青海

明治二五年（一八九二）、種井生まれの青海（本名長右衛門）は上京後、書家として名を成しました。書はもちろんのこと各地の石碑の揮毫等も数多く手掛け、歴史を伝えています。



図107 田川八幡宮境内の石碑

田川（たがわ）

明治九年（一八七六）、岩木川沿いの南から田川・川元・赤堀の三カ村が合併し北津軽郡田川村が誕生しました。そのため、他の地区より事情が込み入っています。

大正一三年（一九二四）発行の『青年の杖』によれば、村名の由来は「元の田川に八幡宮があったため」ということです。大正一〇年、岩木川改修工事に伴い、珍しくも集落全体が東側に移転されています。田川墓地入口にある「岩木川改修共同墓地移転記念碑」（同一二年）がそのことを伝えています。

東は新宮と種井、西は岩木川を挟んでつがる市川除、南は蘇鉄、北は高瀬と接しています。集落は、岩木川右岸の自然堤防上に立地し、南西を岩木川が北流します。赤堀放水（かつての旧十川の一部）が水田地帯の中心を通り、種井との境界を北に流れ、やがて旧十川下流で合流します。なお、種井に通じる道はかつて金木道と呼ばれていました。

地区東部の藪里遺跡からは縄文時代晩期・平安時代・近

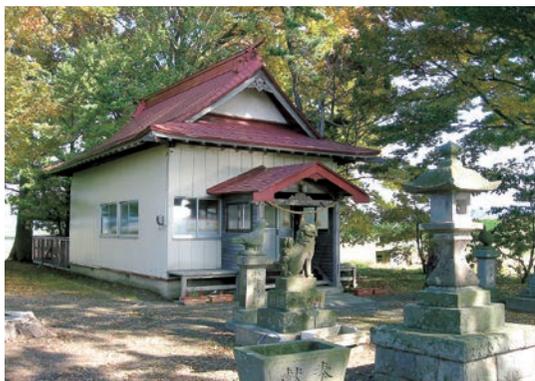


図108 田川八幡宮～五所川原新田開発成就を祈願

世の遺物が見つかっており、この地の歴史の古さを物語っています。先に述べた『青年の杖』は古老の言い伝えとして、「村祖は、木造より来た山形新右衛門、他に小笠原茂右衛門、奈良六右衛門、鰐田惣九郎という説もある。(中略)また、隣の高瀬村とはごく親しく、まるで同村のようなつきあいがあった」と記しています。ただ、その年代等がはっきりとせず残念です。

天正年間(一五七三〜九一)、延萬館という小さな館がありました。戦国の世、飯詰城主との戦いに敗れ、城主は高瀬方面に逃走し、この地にあった長円寺が飯詰に移されたと伝えられています。その後、円満館(のち田川)村と呼ばれていました。同じ頃、岩手県九戸から来たといわれる福士佐助が長渡浪(のち川元)村を開き、『五所川原市総合沿革史』、和泉利明が左組(のち赤堀)村を開いたとされています(『五所川原市史 史料編2 上巻』)。

また、寛永一七年(一六四〇)、御鷹師でもあった渋谷勘十郎が左組(のち赤堀)村の開発に当たり、藩主より初め三〇石、のち七〇石下されました(「由緒書に見る五所川原の新田開発」『北奥文化 第二五号』)。

寛文五年(一六六五)、弘前藩は五所川原新田の開発に着手しました。その際、「五所川原・さくみ二カ所高合四千五百石」との目標を掲げています。両村とも新田開発以前からある古い村の一つでした。また、延宝三年(一六七五)、奈良与五兵衛と渋谷勘兵衛らは長渡浪(のち川元)村の開発によって、藩主より三〇石をいただき、郷警固役を命じられています。

貞享四年(一六八七)

の検地の際、円満館村は田川村、長渡浪村は川元村、左組村は赤堀村に改め、広田組に属していました。同年の「検地水帳」によれば、田川村(字名は弥生田・屋婦里)は、石高は一八二石で、川元村(同浪かへし・若



図109 岩木川をまたぐ奥津軽大橋
(津軽自動車道「五所川原西バイパス」)

草・ふく原)は一四八石で、赤堀村(同たかまつ・川くま)は二四九石でした。合わせると五八〇石ほどでした。元禄三年(一六九〇)の家数は、順に一一、一四、一九の計四四軒でした。

冒頭で述べた明治九年には、家数は田川村が二九、川元村が二九、赤堀村が一五の計七三軒でした。約二〇〇年間にわたる村発展の様子がかがえます。

田川八幡宮は、明暦二年(一六五六)に創建され、寛文元年(一六六一)に再建されました。同一〇年には五所川原新田開発の責任者である鳴海勘兵衛が、難工事の続いた新田開発成就を祈願しました。宝永元年(一七〇四)の「社堂境内記」には境内の広さを一〇間に二九間と記しています。大正時代、岩木川改修工事に伴いお宮も移転されました。現在、岩木川堤防内に「元田川八幡宮」の標柱がわずかに残されています。

明治一四年（一八八一）、田川小学が創立されました。学区は田川・高瀬・新宮・種井・中泊と広範囲に及びました。同一八年には五所川原小学田川分校、一九年には田川小学となり独立します。その後、簡易小学校、尋常小学校、国民学校を経て、戦後の昭和二二年に田川小学校と改称されます。平成元年、惜しまれつつ閉校となり、五所川原小学校に統合されます。跡地はコミュニティ消防センターとなり、各記念碑や長年にわたり同校に勤務した奈良彦太郎先生頌徳碑が建てられています。

現在、田川地区では、交通網の整備が着々と進んでいます。県道一五一号が堤防上を南北に走り、岩木川には新津軽大橋が架かり、広域農道がつがる市と当地区を結んでいます。また、平成二六年一月には津軽自動車道「五所川原バイパス」が開通しました。蘇鉄との境界付近に、岩木川をまたぐ巨大な奥津軽大橋が架かり、自動車が行来しています。岩木川堤防内の川原は広々としています。河川敷公園として整備され、散歩やスポーツ、地区住民の憩いの場となっています。

字名として、弥生、田、藪里、高松、川熊、浪返、若草、福原があります。町内会名は田川です。平成二六年三月末の世帯数は八〇、人口は



図110 吉田松陰先生渡舟記念碑

二一六です。

赤堀の渡わた

寛文年間（一六六一〜七二）、新田開発が進み、五所川原に藩の御蔵ができました。貞享二年（一六八五）、大川（岩木川）には五所川原と赤堀の渡船場が設けられました。何かと便利の良かった赤堀の渡は、交通の要衝となりました。東は田川より種井、川山を経て飯詰村や金木村に通じ、西は川除、木造、越水を経て鱒ヶ沢に達する道は赤堀道とも金木通りとも呼ばれていました。赤堀渡は、対岸の芦屋とを結び、馬船うまぶね一艘で運んでいました。「木造・金木・五所川原新田付近の人々の往来はなほだ繁く、一日の渡船者千人を下らず」（『青年の杖』）とあり、その盛況ぶりが伝わってきます。嘉永五年（一八五二）、長州藩の吉田松陰らもここを渡舟しています。昭和一五年（一九四〇）に建てられた石碑「吉田松陰先生渡舟記念碑」が今も川面を見つめています。

明治一四年（一八八一）当時、水幅一〇〇間（約一八〇m）、馬船一、小船一、渡賃は人二厘、馬六厘、車六厘であったそうです。なお、東北屈指の大地主となった佐々木嘉太郎こと通称「布嘉」が、明治の頃ここを毎朝渡り、五里の道のりをいとわず鱒ヶ沢まで仕入れに行き来し、後に財をなしたとも伝えられています（『ふるさと』の思い出写真集 明治大正昭和 五所川原）。

明治一七年（一八八四）、五所川原に乾橋が完成し、道路が開通しました。その後も渡は続きましたが、大正一〇年（一九二一）、岩木川改修事に伴い、ついに廃止となりました。

新宮（しんみや）

東は若葉と長橋、西は蘇鉄と田川、南は新宮町と末広町、北は種井と長橋に接しています。西方の岩木川、東方の旧十川が北流する、ちょうどその中間に位置します。土地は平坦で、北西部には水田地帯が広がり、南部は、自然堤防上に住宅地が密集しています。



図111 五所川原小学校近くの交差点と住宅街

村名の由来については、「相馬村（弘前市）御所に祭られていた小さなお堂が五所川原に流れ着いた。それを新宮の人が拾い上げ、あまりに立派なので新しく社殿を造り、村名を新宮村と名付け敬っていた。その後、村人が協議した結果、流れ着いた場所である元町にお堂を戻すことになった」との伝説があります。

村祖として、『青年の杖』には、一七世紀前半、信州松本より松本家の先祖が、途中で出会った山川家の先祖と共にこの地に移り住んだとあります。他に笠井家や川村家の名が見えます。ただ、いずれもはっきりしたことは分かりません。

新宮村も五所川原新田一五カ村の一つです。天和三年（一六八三）には五所川原遺、貞享四年（一六八七）の検地の際には広田組

に属し、同年の「検地水帳」には田二四町、畑二町、村高一九六石とあります。元禄三年（一六九〇）、家数二一軒でした。

明治初年には、家数は一七軒でした。明治二二年（二八八九）、中川村大字新宮となり、昭和二九年（一九五四）に五所川原市の大字になりました。昭和四五年（一九七〇）には県営および市営新宮団地造成が始まりました。昭和五五年、それに伴い、新宮字岡田の一部は若葉二丁目、三丁目に町名が変更されました。

字名として、松元（かつては松本）、稲村、岡田、藤代の四つがあります。そのうち松本は、松本家の先祖が開いたために名付けられたそうです。子孫の松本善行は、初代中川村戸長となり、明治二〇年（一八八七）には、中泊より柏原に抜ける道路を開き、川山に旧十川をまたぐ開運橋を架けました（『青年の杖』）。

平成二六年十一月、津軽自動車道「五所川原西バイパス」が開通しました。当地区北部の水田地帯を東西に横切っています。南部の字岡田や松元は、県道一六三号沖飯詰五所川原線が南北に、幾世森からほぼ東西に市道が走り、交通の要衝になっています。五所川原小学校周辺の道路沿いには住宅街がなお広がっています。

町内会は、ニュータウン新宮、若葉苑・新宮町があり、それぞれ活動しています。平成二六年三月末の世帯数は一四一、人口は三五五です。

長橋（ながはし）

東は旧十川を挟み太刀打と川山、西は種井と新宮、南は幾世森と若葉、北は川山と接しています。西方に岩木川、地区の中を旧十川が北流します。地区は南北に細長く、北部は長橋（中泊）、中央は水田地帯、南部は県営住宅等が立ち並び若葉に分断されています。

十三盛遺跡（長橋字広野・新宮字稲村）からは、主に平安時代の大規模な集落跡やたくさん遺物が見つかっています。平安時代後期、岩木川周辺の開発が進められていった様子がうかがえます（詳細は、「第一章第一節二の二」を参照してください）。

地名の由来については不明ですが、字名の橋元とも合わせると、旧十川に架けられた橋に関係したものでしょうか。

通称の中泊なかどまりについて少し述べます。江戸時代、大川おおかわ（岩木川）水系の水運が盛んでした。かつて「大泊おおどまり」と呼ばれていた藻川を經由し、旧十川も船が往来していました。そのうち、この地も船が停泊する川湊となりました。船主達が取引のためここに家を建てたことにより「中泊」と言われるようになったと伝えられています。その



図112 長橋(中泊)と川山の間を流れていた旧十川

後、中泊は下長橋とも呼ばれるようになりますが、通称中泊の地名は現在もしっかりと息づいています。

村祖として、高橋久左衛門たかはし きゅうざえもんの名が知られています。延宝年間（一六七三～八〇）、字広野に三〇町歩を開墾し、長橋（中泊）の墓地をつくりました。そこに植えられた松の木は有名でした。

長橋村も五所川原新田一五カ村の一つです。天和三年（一六八三）には五所川原遺、貞享四年（一六八七）には広田組に属しました。明治九年（一八七六）の『新撰陸奥国誌』によれば、「下長橋村家数二四軒、支村として上長橋（本村の南平井村に交じる）、家数二〇軒」とあります。明治二二年、中川村大字長橋となり、昭和二年（一九五四）に五所川原市の大字になりました。

昭和三六年（一九六一）、市役所の所にあつた五所川原小学校が長橋字橋元（五所川原高校の北）に移転されました。平成元年に新宮へ再移転するまで、多くの卒業生を輩出しました。

昭和五五年（一九八〇）、新宮団地の造成に伴い、長橋字広野と橋元の一部は若葉一丁目及び三丁目に町名が変更されました。字名と



図113 通称名の残るバス停と上中泊橋

して、橋元(かつては橋本)、藤島、広野があります。

平成二六年一月、津軽自動車道「五所川原西バイパス」が開通しました。旧十川には望橋が架けられ、当地区中央を東西に走っています。なお、長橋(中泊)と川山には、旧十川のかつての河道に沿って旧十川河川公園が整備されています。町内会名は中泊で、活動を続けています。平成二六年三月末の世帯数は二五〇、人口は六七四で、中川地区では唯一世帯数、人口ともに増えています。

若葉(わかば)

東は幾世森と長橋の一部、西は新宮、南はJR五能線を挟み末広町と長橋の一部と接しています。地区の形は逆「D」の字です。

この地区は元々主に長橋字橋元および新宮字岡田に属し、水田地帯でした。昭和四五年(一九七〇)、県住宅供給公社が県営の、市が市営の新宮団地造成に着手し、新しいまちづくりがスタートしました。その後、五年の歳月をかけて敷地面積一〇・九haの宅地に生まれ変わり、市営住宅二三三戸、県営住宅一〇〇戸、一般住宅二八一戸、計六一四戸が完成しました。多目的な集会場としての森の家、児童遊園地、二〇〇台余収容の駐車場、公共下水道等が次々と整備されていきました。とりわけ団地の目玉と言われたのは、団地中心部に建てられた特定目的住宅です。高齢者や身体障がい者、母子家庭等に対する福祉対策と住宅難解消の一石二鳥をねらったものでした。これらに伴い、川山地区に抜ける県道一六三号の道路改良工事

も急ピッチで進められました(「津軽の町内めぐり」『東奥日報』)。地名の命名ついて、昭和五五年(一九八〇)四月一日、市長の諮問機関である五所川原市住居表示審議会が開かれました。その議事録によれば、これまでの審議や住民のアンケート調査を元に、町名を「若葉」「青葉」のいずれにするかに絞って話し合いをしました。



図114 若葉の団地と岩木山(右は五所川原小学校)

その結果、「単に若葉でなく、若葉のような若々しく燃え上がるような象徴で栄えていただきたい」という願いを込めて、最終的に若葉に落ち着きました。同年五月一日付の『広報ごしよがわら』によれば、同年四月二日に公示し、七月一五日から新住居表示が実施されました。それと同時に、若葉の中央を東西に走る市道の南東が一丁目、南西が二丁目、北部が三丁目と命名されました。

その後、北部にある県営新宮団地は、平成一〇年から一四年にかけて、計二四棟一〇二戸が建て替えられました。それと呼応するように周辺には個人の住宅やアパート、事業所が次々に立ち並び、閑静な市街地が北に西に広がりつつあります。

昭和六〇年（一九八五）当時、この地区は世帯数六五一、人口二〇六七でした。平成元年には近くの新宮字岡田に五所川原小学校が移築されました。その後、市道や国道三三九号北バイパス、西バイパスの整備が進められました。東隣の幾世森にはふるさと交流圏民センター「オルテンシア」、地域福祉センター、老人ホーム、北部公園、市民プール等の公共施設が建設され、スーパーマーケット、ドラッグストア、コンビニエンスストアも進出し、利便性が増しています。ただし、平成二六年三月末の世帯数は、昭和六〇年に比べると六五七とほぼ横ばい、人口は一四一〇と約三〇％も減少しています。やはりこの地区においても核家族化、少子高齢化の影響をものろに受けているのが分かります。

なお、町内会は若葉市営住宅、若葉県営、若葉第一、若葉第二があり、それぞれ活動しています。

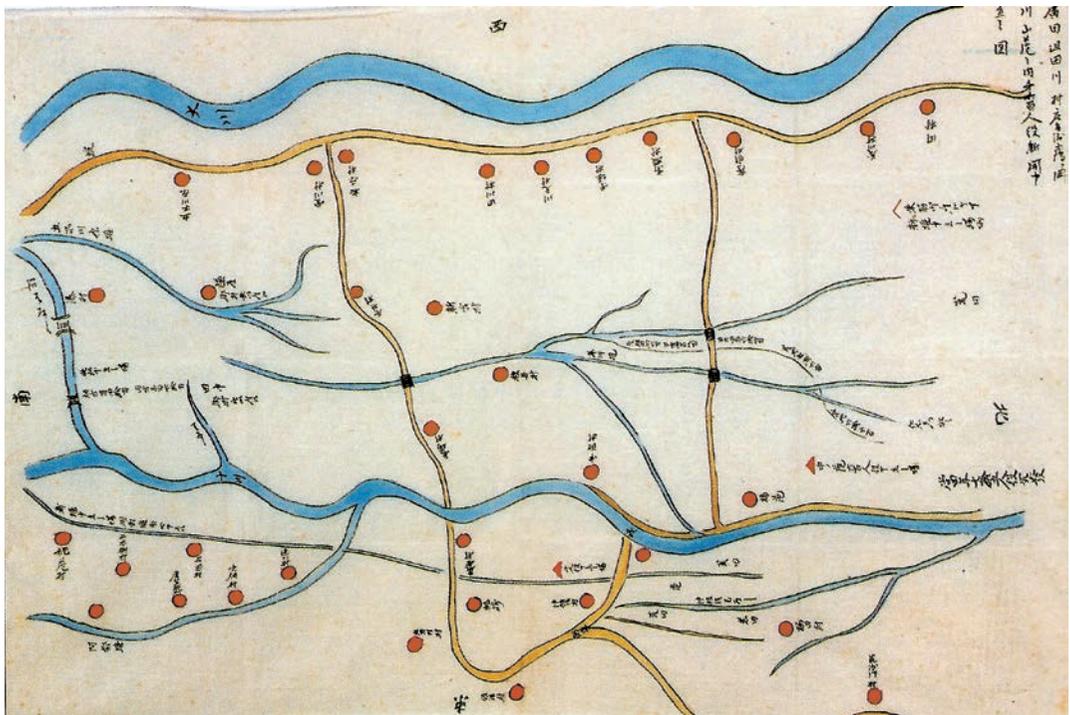


図115 鶴ヶ丘(岡)川山范之新開申立之図・江戸時代後期（『津軽家文書抄』より）

第十節 三好地区の地名

江戸時代初期、寛文五年（一六六五）から延宝四年（一六七六）にかけて、弘前藩の直営工事である五所川原新田一五カ村の開発が行われました。その中には本地区の前田（のち高瀬）、鶴ヶ岡、大泊（のち藻川、茂川とも）も含まれます。元禄四年（一六九一）には五所川原堰（現藤崎町の平川右岸より取水）が完成しました。これにより用水が、鶴田、五所川原、中川、三好の約一三〇〇町歩の水田を潤し始めました。元禄六年、弘前藩内の主な街道に一里塚（二六町）が設けられました。現在は残っていませんが、この地区では高瀬と鶴ヶ岡の間と下藻川の南端の二カ所にあつたようです。三好村は、明治二二年（一八八九）、町村制の施行により、北津軽郡鶴ヶ岡村、高瀬村、藻川村の三カ村が合併し生まれました。『五所川原市綜合沿革史』によれば、「三村仲良クスルヲ以テ三好村ト名ヅク」とあり、村名に住民の願いが込められています。その当時は、五所川原村の北西部に位置し、東と南は十川を挟んで嘉瀬村と中川村、西は岩木川を挟み西津軽郡稲垣村・出精村・川除村、北は金木村と接していました。

集落は、岩木川右岸の新旧の堤防沿いに南



図116 小野忠造翁頌徳碑

から高瀬、鶴ヶ岡、藻川とほぼ連続します。役場は中央に位置する鶴ヶ岡にありました。集落の東や北には、平坦な土地に広大な水田地帯が広がり、秋には見渡す限り黄金の稲穂が風にゆれます。

しかし、岩木川と旧十川に挟まれた低湿地であるために、かつてはたびたび雪解け水や大雨による水害に襲われました。逆に、日照りが続くと一転して水不足となり、水争いまで起きるほどでした。「三好の歴史は水害・凶作との死闘。そして克服の道であった」〔津軽の町内めぐり〕『東奥日報』と言っても過言ではありません。

私設堤防事件

有名なのが、明治二八年（一八九五）から同三〇年にかけて起きたこの事件です。水害を防ごうと初代村長も務めた小野忠造の指揮の下、村人総出で約一三〇〇mもの堤防（通称小野忠造土手）を築きました。ところが、結局は県の許可を得ずに造ったということで、命令により堤防（上部のみ）が取り壊されました。なお、この堤防は、その後八〇年余にわたり機能を果たしました。昭和五三年（一九七八）の基盤整備事業により姿を消しましたが、県道沿いに建つ碑がひっそりとその歴史を伝えていきます。

その後も昭和の三度にわたる大水害等を経て、戦後の昭和二八年（一九五三）、十川排水樋門の完工により、ようやく水害との戦いにピリオドを打つことができました。

昭和六年（一九三二）、五所川原・三好間のバス路線を津軽鉄道に譲り渡すとあり、その頃すでにバスが活躍していた様子がわかります（『五所川原三百年史 経済編』）。

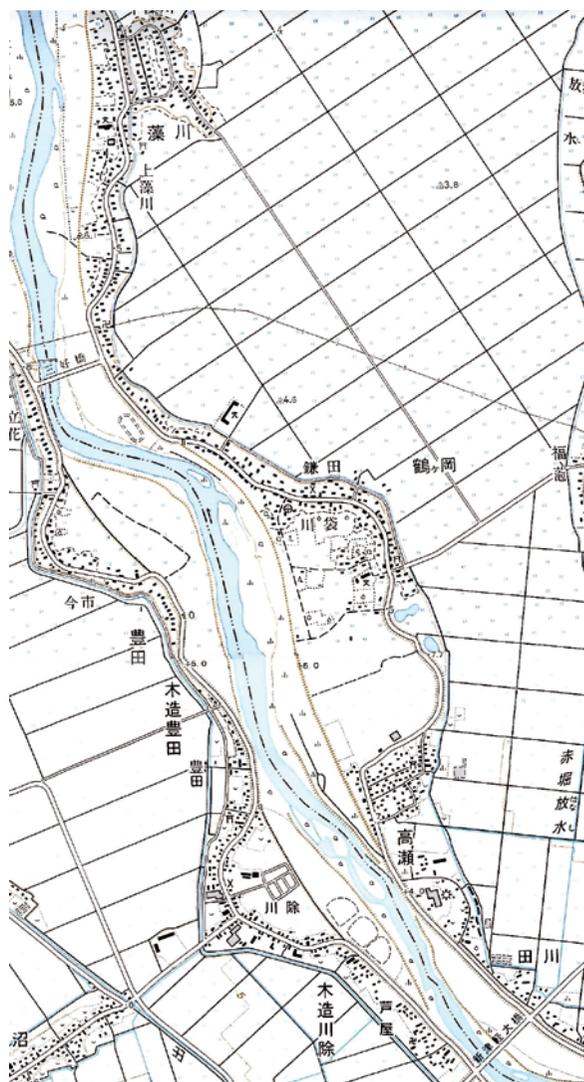


図118 三好地区の川袋の様子
(国土地理院の2.5万分の1地形図)

を務め、治水に生涯を捧げた両名は忘れてはならない人物です。なお、長尾は著作『三好村郷土誌』、『岩木川物語』を著しています。

鶴ヶ岡（つるがおか）

東は旧十川を挟んで川山、西は岩木川に架かる三好橋により対岸の出野里（つがる市）と結ばれ、南は高瀬、北は藻川と接しています。集落は、岩木川右岸の新田堤防沿いに連続します。旧堤防内は、高瀬地区から続く広大な「川袋」となっ

昭和二九年（一九五四）、三好村を含む一町六カ所が合併して市制施行し、五所川原市がスタートしました。同年、待望の三好橋が架けられ、対岸の木造町と結びました。同四五年には、コンクリート製（全長三二二m）に架け替えられました。平成二六年三月末の当地区の世帯数は六三〇、人口は一七二八です。

二人の先覚

昭和五七年（一九八二）、岩木川治水記念碑が元町の浄水場北側に建てられました。その碑文には、「（前略）夙に岩木川治水改修を畢生の悲願として私財を抛げこれを唱えし先覚に小野忠造翁あり長尾角左衛門翁あり（後略）」と刻まれています。ともに三好村長

ており、かつての岩木川が右へ左へと深く蛇行していたことが分かります。現在は主に畑地として利用されていますが、江戸時代には弘前藩の鷹場が設けられていました。集落の北東、旧十川までは広大な水田地帯が続きます。

『鶴ヶ岡小学校百年史』には、「（地名の）鶴ヶ岡は、たびたび鶴が飛んできたことに由来する」とあります。鶴の長寿にもあやかりおめでたい名の一つと言えます。

『五所川原市史年表』によれば、寛文二二年（一六七二）、相馬甚助と渋谷兵左衛門が、鶴ヶ岡新田の開発を藩に願い出て、左組（赤堀のち田川）・鶴ヶ岡間の水除堤（堤防）を自費で築きました。延

宝三年（一六七五）には高瀬以北の岩木川の改修が行われ、蛇行の激しい八ヶ所の掘り替えがなされました。天和元年（一六八一）、相馬・渋谷が鶴ヶ岡新田頭になります。貞享二年（一六八五）、姥菴より鶴ヶ岡までの懸堰四五〇間（約八・一km）が開通します。同年、鶴ヶ岡の開墾が成就し、両名はその功により弘前藩より一〇〇石を下され、新知士に取り立てられています。

貞享四年（一六八七）広田組に属し、「検地水帳」によれば、田一一〇町、畑九町歩ほど、村高は八四七石でした。元禄三年の家数は四二軒でした。ちなみに検地帳には田畑の他に「留林 三〇町四反鷹待場」ともあります。明治の初め、家数は八九軒でした。

『鶴ヶ岡小学校百年史』によれば、福菴の開墾は享保二年（一七一七）に始まりましたが、

享和元年（一八〇一）には水害と凶作のため廃村となりました。その頃、福井の開墾が始まり、文化八年（一八一二）に八軒が移住し、福菴と合わせて福井村となりました。天保五年（一八三四）の「郷帳」には下福井村八一石とあり、明治九年（一八七六）、鶴ヶ岡と合併しました。なお



図119 川袋内の畑地

川山と三好を結ぶ道（県道林五所川原線）は古くから「福井通り」と呼ばれ、バス停にもその名が残っています。

明暦二年（一六五六）、鶴ヶ岡の八幡宮が創建されました。昭和二年（一九四九）、小野忠造翁頌徳之碑が集落北側の堤防沿いに建立されました。周辺は手入が行き届き、ここから望む岩木川、岩木山の眺めは絶景です。

鶴ヶ岡は、旧三好村役場所在地であったことから、小中学校や三好郵便局、農協等が集まっていました。明治九年（一八七六）、鶴ヶ岡小学が創立され、同一九年には藻川小学校を合わせ、鶴ヶ岡小学校となります。昭和二年（一九四七）、三好小学校と改称され、同二六年には鶴ヶ岡小学校と藻川小学校に分かれました。平成一六年、三好小学校は再び両校を統合し、元三好中学校の校舎を引き継いで現在に至ります。

字名として、鎌田、唐橋、鈴方、白旗、鶴菴、中菴、川袋、福田の八つがあります。町内会は鶴ヶ岡と福井があります。平成二六年三月末の世帯数は二〇四、人口は五三二人です。

高瀬（たかせ）

東は種井および川山、西は岩木川を挟んでつがる市豊田・川除、南は田川、北は鶴ヶ岡と接しています。集落は、もともと岩木川右岸の自然堤防（現県道一五一号蒔田五所川線）上に立地していましたが、後に造られた新堤防沿いにも連続しています。西側を岩木川

が、東方を旧十川が北流します。新堤防内の川原は、背の高い木々やスキキなどで一面覆われています。旧堤防内は鶴ヶ岡へと続く大きな「川袋」となっており、麦をはじめ畑地として利用されています。その東には長沼、丸沼があり、貴重な農業用水を供しています。村名の由来は不明ですが、高瀬とは川の浅いところ、浅瀬を意味します。大川（岩木川）に関係したものでしょうか。『青年の杖』には、「延萬館（のち田川）の城主が戦いに敗れ、北方川の瀬に逃げ隠れたところ、この所を高瀬という」と記されています。

三好地区の中では一番古い慶安三年（一六五〇）、木村林右衛門が村を開きます。家数は一〇軒で、場所は高瀬の南側でした。のち水害により現在地に移住しています。木村はその功により弘前藩より^{かみもと}祿をいただいたとあります。また、明暦年間（一六五五～五七）、弘前より黒滝半三郎が移住したとあります（『三好村郷土史』・『鶴ヶ岡小学校百年史』）。その後、天和三年（一六八三）には五所川原遣前田村、貞享四年（一六八七）の検地の際には広田組に属し、高瀬村に改められました。同年の「検地水帳」によれば、石高は二五六石でした。元禄三年の家数は二四軒でした。

高瀬も、岩木川と旧十川の洪水によりたびたび大きな被害を受けました。藩は、農民を励まし新田開発を進めるとともに、大規模な水害防止工事も随分と行っています。延宝三年（一六七五）、高瀬から小田川合流地点まで岩木川の内曲り八カ所改修がなされました。『五所川原町誌』には、その堤防上の道を利用して板柳・藤崎を経由して弘前まで通うことが可能になったとあります。

元禄一四年（一七〇一）、五所川原、高瀬間の大川沿いの堤防三カ所修築に人夫一万余が動員されます。享保二年（一七二七）、鷹待場を田畑や漆木仕立場に開発していきます。

明和七年（一七七〇）には川袋すなわち鷹の爪を畑地として開発し、年貢の五～八年間の免除を受けています。寛政一〇年（一七九八）、大洪水により高瀬から鶴ヶ岡、藻川にかけての堤防が数十カ所破損し、一面の水浸しで皆無作となりました。翌年、堤防修理に八〇〇〇余人が投入されます。

幕末の嘉永六年（一八五三）頃には用水路の整備に伴い、荒地地が田三町歩、畑一町歩に生まれ変わっています。また同じ頃、藩に対し、川端の一三〇〇坪に和紙の原料となる楮の植え付けを願う者、また、五〇町歩の開田と漆の植え付けを願う者もいました。こうしてみると、先人の不撓不屈の精神には本當に頭が下がります。なお、明治の初め、家数は六七軒でした。

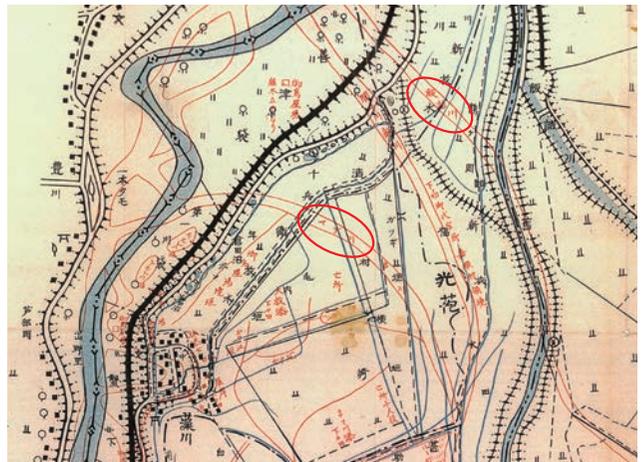


図120 三好村変遷図（一部拡大） 間手川・飯詰川

貞享四年（一六八七）の頃、稻荷宮が創建、寛延二年（一七四九）には熊野宮に改称しています。

現在、岩木川沿いに河川防災ステーションが設けられ、水害に備えています。地区南には中央クリーンセンター、昭和四四年（一九六九）に市誘致企業第一号となったコンクリート製品工場があります。字名として、一本柳、二見、鷹ノ爪、雲雀野があります。かつては鷺ノ爪という字名もありました。この地にも鷹や鷺が多く生息していたと思われます。町内会名は、高瀬です。平成二六年三月末の世帯数は一二五、人口は二九〇です。

藻川（もがわ）

東は旧十川を挟み川山と嘉瀬、西は岩木川を挟み、つがる市出野里・豊川・穂積・繁田、南は鶴ヶ岡、北は蒔田と接しています。集落は、岩木川右岸の細長い自然堤防上、県道一五一号蒔田五所川原線の両脇に立地します。集落の北、県道の東側には小さな溜池が点在します。これは洪水が収まった後の名残です。地区の東側を北流する赤堀放水は元間手川と言われ、かつての旧十川の流路跡に当たります。

残念ながら地名の由来は不明ですが、この辺りの岩木川の川底に多くの藻が生えていたからでしょうか。

天和三年（一六八三）には五所川原遣に属し、岩木川水運の川湊「大泊」があったことから大泊村と呼ばれていました。貞享四年

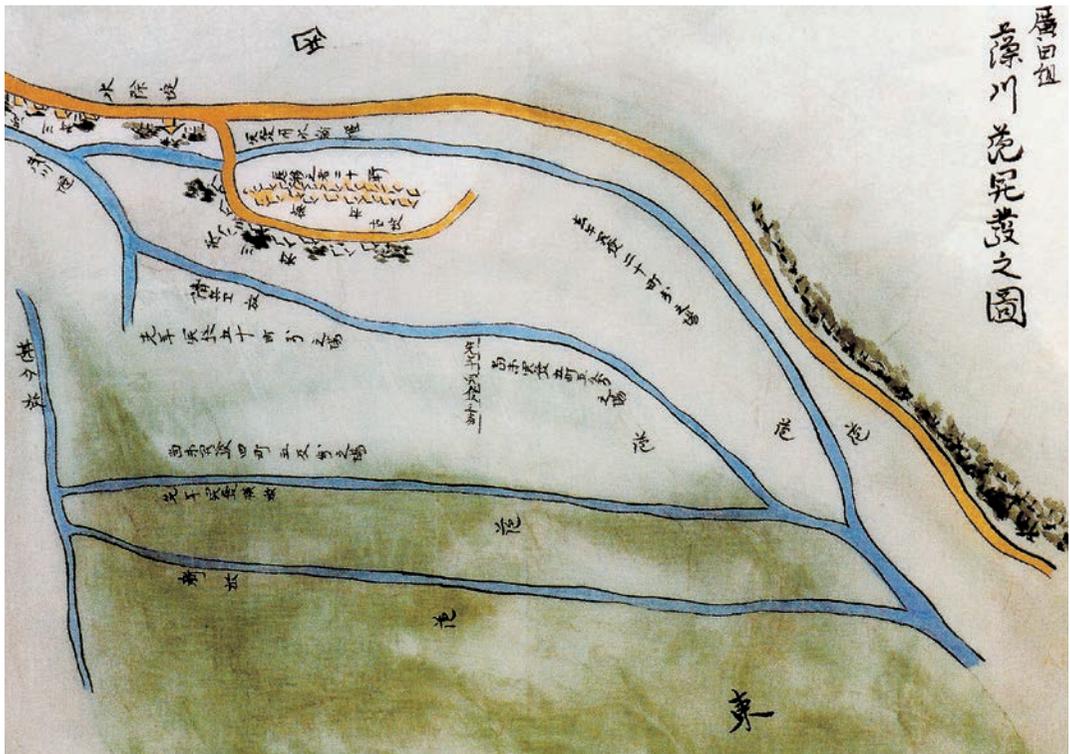


図121 広田組藻川范児葎開発之図・文政6年（1823）（『津軽家文書抄』より）

(一六八七) 広田組に属し、藻川(茂川とも)村と改められました。同年の「検地水帳」によれば、田一四町歩、畑一五町歩あまり、村高一五〇石とあります。元禄三年の家数は二七軒でした。因みに検地帳には田畑の他に「留林^{とめばやし} 場^ば広^{ひろ}故^こ不^ふ及^及検地^{けんち} 鷹待場^{たかまち} 但雑木有^{たゞぞうきあり} 二箇所^{ふたつか所}」の記録もあります。

天明二年(一七八二)、毛内治兵衛が藻川の北東部の開発に着手し、天明の大飢饉をはさみ、文化五年(一八〇八)までに計二七〇町歩の開発に成功しています。この功績により毛内家は川浪、開米家らとともに新田人^{ひとせやく}寄役を命じられています。ちなみに治兵衛は錦町辺りに「毛内林」も造林しています。また、同じ頃、長尾重助が開発の遅れた所の開拓に従事し、堤防改修に四千人もの人夫を送り込んでいます(『五所川原三百年史 経済編』)。

村の北に位置する中島(下藻川)は、文政五年(一八二二)、開米治左衛門が二〇軒で村建てをし、同八年には五百間堤を築いています。文政六年作成の「広田組藻川藩開発之図」(図121)には、岩木川沿いの水除堤、五本の堰、広大な菴とともに、古堤に囲まれ「居住之者二十軒 新村」と記された中島が見えます。そこには「川袋」の痕跡^{あと}がうかがえます。

天保五年(一八三四)の「郷帳」に石高一三六六石とあります。約一五〇年をかけて、九倍強に増やしています。

明治九年の『新撰陸奥国誌』によれば、下茂川村の家数は八八軒、本村の南に位置する支村の上茂川村は二三軒でした。

また、同じく支村であった成戸^{なると}は、幕末の慶応から明治初年にか

けて堤防を築き、三三軒で村建てしました。明治三年(一八七〇)、弘前藩最後の藩主であった津軽承昭^{つがるのりあき}が巡視した際に命名されました。明治九年には藻川と合併しています。しかし、同二五年、残念なことに水害に耐えかねて廃村となりました。旧十川下流に鳴戸橋の名が残っています。

なお、慶応三年(一八六七)の「広田組・茂川・鶴ヶ岡・種井三カ村之内開発図」には、河川や堰、村々、新田の開拓者の名前も記されています。旧十川左岸には広大な菴が薄墨で表されています。また、藻川の北に赤く塗られた新村があります。ここが成戸に当たります。かつては藩の御用芦場でした。その後、明治二年(一八八九)、小野忠造らにより光菴が開墾されます。

明暦二年(一六五六)、水神を祀る胸肩神社^{むなかた}が創建され、寛文三年(一六六三)には善照寺^{ぜんしょうじ}が建立されました。明治一八年(一八八五)、春の大洪水により三好地区は九割以上の浸水となり、十和田沼ができました。これを機に十和田神社を建立しました。

明治一四年(一八八
一)には藻川小学校が
創立されました。

藻川は、上藻川と下
藻川に大きく分けられ
ます。字名として、村
崎^{さき}、千年^{ちとせ}、中島^{なかじま}、川袋^{かわぶくろ}、
善津袋^{ぜんつくろ}、蟹下^{かにした}、蟹淵^{かにぶち}、



図122 善津袋開田記念碑

光菴、間手川まてがわがあります。こうして見ると、岩木川に關係の深い地名が並んでいます。なお、町内会名は藻川です。平成二六年三月末の世帯数は三〇一、人口は九〇六です。

藻川の渡わた（大川舟場）

岩木川を対岸の出野里（現つがる市）と小船で結んでいました。安永八年（一七七九）には馬船うまふね一艘、安政四年（一八五七）には自分渡（個人営業）でした。明治に入り、藻川と鶴ヶ岡で馬船を用意し、渡守を定めて営業してました。地元の人々は渡賃として、米を充てたといいます。よそからの往来者は渡賃を払って利用してました。夏季水枯れの際は仮橋をかけて渡賃を徴収したということです。冬は水上を渡ったようです。

明治一四年（一八八一）、水幅九〇間（約一六二m）、馬船一、渡賃は人三厘、馬六厘、車六厘であつたそうです。

昭和二九年（一九五四）、待望の三好橋が架けられ、陸路交通が主流となりました。

鷹の名産地

『五所川原市史年表』によれば、享保元年（一七一六）、「藻川の鷹を將軍徳川吉宗に献上」とあります。この地にはかつて弘前藩の鷹待場たかまちば（鳥屋場とやば）が七カ所ありました。それに伴い、一帯の鳥屋林とやばぢは嚴重に保護され、木を切つた者は罰せられました。

寛文五年（一六六五）から天明五年（一七八五）までの捕獲鷹一覽を見ると、二〇〇居程すえのうち約九〇％は藻川産で占められています。まさに鷹の一大産地でした。

次に、捕獲した場所に目を転じると藻川村曲沼、上善津、古川添、笹鳥屋、中沼下谷地、中沼下善津、与左衛門沼と御鳥屋がずらりと並んでいます。鷹の種類は、若黄鷹わかたか（大鷹の幼鳥の呼び名で若鷹ともいいます）が圧倒的に多いです。鷹献上のご褒美ほうびとして銀などが出されてきました。かなり価値が高かつたのでしよう。

藻川の林コ

「八つアエー 弥三郎ア家コばかり日コア照らね 藻川の林コさも日コア照らね」これは、嫁いびりで有名な津軽民謡の「弥三郎節」の一節です。ちょうどこの唄が生まれた頃に描かれた、前述の「広田組藻川菴開発之図」には、墨痕あざやかに一大森林地帯ぜんぶくわ（善津袋）が描かれています。

かつて藻川には巨木・大木が数kmにわたって生い茂る、昼なお暗くすさまじいと言われた林がありました。そこは湿地帯で、群生していたのは「黒だもハルニレ」（英名エルム）をはじめ、ヤチダモ、ハンノキ、カワヤナギなどでした（草木の世界6 五所川原市からの報告「『東奥日報』」）。

錦町辺りの毛内林もうないばやしなどもそうですが、先人はこれらの木々を伐採し、根っこを掘り起こしながら田畑を開き、道を通して集落を形づくってきたのです。

藻川保育園の北、左手に昭和三二年（一九五七）に建てられた善津袋開田記念碑があります。碑文には「〜弥三郎節ノ思出ノ地〜善津袋五十貳町歩ハ時代ノ脚光ヲ浴ビテ開田シ〜」とあります。藻川の林コは食糧増産のために、美田に生まれ変わっていききました。

旧十川 別名尻無川、間手川

『岩木川物語』によれば、元々の十川は、黒石市黒森より発し、湊で岩木川（大川）に合流し、川湊の用をなしていました。正保二年（一六四五）、湊村を開墾する際に東の方に掘り替えられて、湿地帯であった尻無において飯詰川、松野木川に合流していました。

天和年間（一六八一〜八三）、間手川（尻無川とも）と称して、田川と種井の間を北流し、鶴ヶ岡の北で西に向かい、藻川地内の北端で岩木川に注いでいました。

元禄一五年（一七〇二）、藻川、鶴ヶ岡、高瀬、赤堀、川元、長橋、川山、桜田の諸村水害防御のため、長さ二〇〇〇間、幅六間深さ六尺に掘り替えしたのがほぼ現在の旧十川です。藻川の北端で岩木川と合流し、流路は一五里（六〇km）程でした。

元十川すなわち間手川の上流は赤堀放水と名付けられ、赤堀、種井、高瀬、鶴ヶ岡の排水路として存在しています。その下流は痕跡さえ見つけるのが難しいのですが、藻川字間手川という字名はしっかりと残っています。

時代は下って、昭和五年（一九三〇）、岩木川の大屈曲を直して、堤防を築いた結果、十川は金木町神原で合流するようになりました。

終戦後の昭和二十四年（一九四九）、栄村から不魚住までを掘削し、岩木川に合流させる新水路、すなわち「新十川」ができました。一方、元々の十川は姥薨で打ち切られて独立の河川となり、以後「旧十川」と称されるようになりました。

その頃、期を同じくして各地区に逆流防禦樋門が建設され、よう

やく湛水を免れるに至りました。



図123 旧十川 下平井町・太刀打付近（十川橋より北を望む）

第十一節 毘沙門・長富地区の地名

明治三二年（一八八九）、市制町村制の施行により、北津軽郡毘沙門村・長富村・嘉瀬村・中柏木村の四カ村が合併して、北津軽郡嘉瀬村としてスタートしました。

昭和三〇年（一九五五）三月、嘉瀬村大字中柏木・嘉瀬・長富は、金木町・喜良市村と合併し北津軽郡金木町となりました。一方、嘉

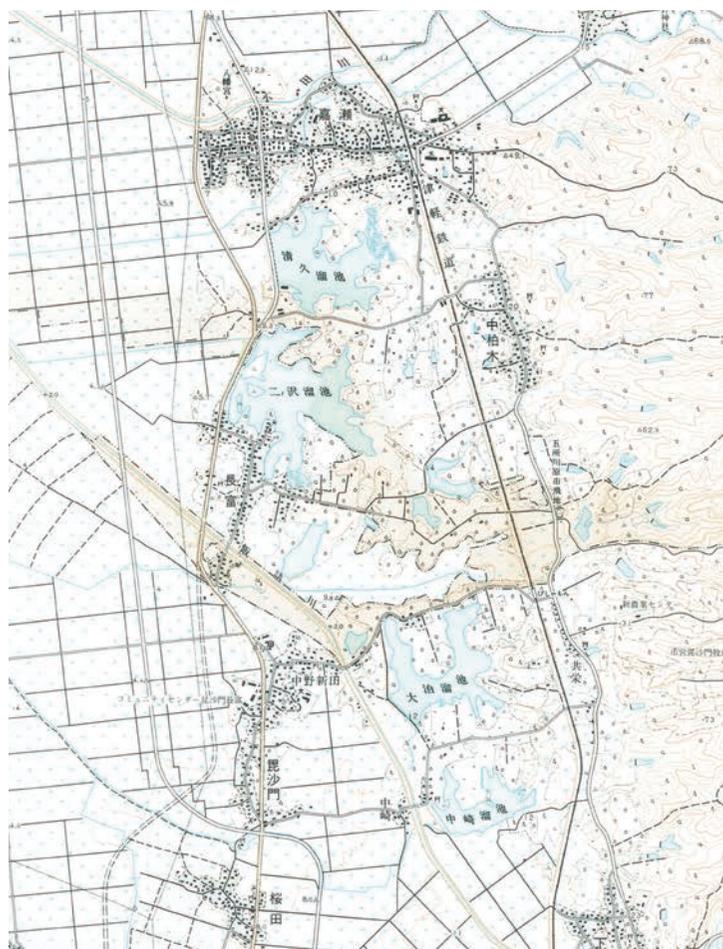


図124 毘沙門・長富地区の溜池
(国土地理院の2.5万分の1地形図)

瀬村大字毘沙門は五所川原市に編入されました。さらに、翌三一年八月には、金木町に属していた大字長富が五所川原市に編入されて現在に至っています。長富の中心部道路沿いに「分村合併記念碑」があり、そのことを伝えています。平成二六年三月末の両地区を合わせた世帯数は四〇四、人口は九七四です。

飯詰川

この地区にとって、重要な役割を果たす飯詰川について少し詳しく述べていきます。

大昔の飯詰川と天神川は、それぞれ平野への出口にイチヨウ葉状の平面形で半円錐状堆積地形の扇状地をつくりました。両河川のうち、飯詰川は四度ほど掘り替えられたようです。初めは茅野原の低湿地であった尻無の地へ流れていましたが、その後、桜田と沖飯詰の間を通っています。元禄（一六八八〜一七〇三）の頃の絵図では、毘沙門と桜田の間を流れ西に向かい、鶴ヶ岡字福田の鶴ヶ范開墾地の中央部を流れ、藻川で直接岩木川に流入していました。元禄一五年（一七〇二）には十川の掘り替えに伴い、飯詰川をそれに合流させています。

文政二年（一八一九）、其田弥太郎そのたやたろうにより、下岩崎・長富と毘沙門の間を直線的に北西に流れ、十川に流入するという現在の飯詰川に掘り替えられました。

明治三〇年（一八九七）頃の記録を見ますと、飯詰川の河床が沿岸の田畑より高く（天井川と呼ばれます）、かつ川幅も三間と狭く、たびたび増水決壊し、沿岸の人々を悩ませていたことが分かります。大正五年（一九一六）から昭和三年（一九五八）にかけて、上流の坪毛沢つぼけさわにヒバを利用した一基の「木製えん堤」が造られました。半世紀を過ぎた今も下流域への土砂流出を抑えています。このえん堤は、林野庁東北森林管理局管内の「後世に伝えるべき治山」よみがえる緑」に選定されています。

その後、昭和七年（一九三二）の洪水、昭和三〇年代の台風や集中豪雨により沿岸は大きな被害を受けてきました。そのたびに改修工事を重ねてはきたのですが、抜本的な対策の見直しが必要となりました。同四年、飯詰川総合開発事業に着手し、同八年（一九七三）には飯詰ダム（不動湖）が竣工し、その後、護岸工事も進められて、ようやく水害を免れるようになりました。

毘沙門（びしゃもん）

東は下岩崎・飯詰、西は川山、南は桜田、北は長富・一



図125 飯詰川と長富橋

部中柏木と接しています。集落は、南の桜田から続くかつての自然堤防上に立地します。昭和四〇年（一九六五）、地区の中心を南北に貫く県道バイパスが完成し、同五〇年、国道三三九号に昇格しました。南東からこめ米ロードが毘沙門十文字で直交し北に向かいます。飯詰川が南東から北西に流れ、各道路と交わります。

また、東部の共栄地区では県道三六号五所川原金木線が南北に貫きます。それと並行するように津軽鉄道が走り、毘沙門停留所があります。南部・西部は水田、東は大小多くの溜池が点在し、リング畑が広がります。中でも飯詰川の東側にある中崎溜池、大泊溜池は大きく、満々たる水を湛たえています。

地名の由来について、はっきりしたことは分かりませんが、一説によると、津軽為信が飯詰高楯城攻めの際、この地に毘沙門天を勧請し、本陣としたことに因ちなんで付けられたとも伝えられています。

承応二年（一六五三）、成田十右衛門なりた じゆうゑもんがこの地の三〇石を開発し、藩より小知行こちぎょうと呼ばれる下級藩士に取り立てられています。寛文四年（一六六四）の「郷帳」には、毘



図127 右の一部拡大



図126 中崎村中と刻まれた百万遍

沙門二二三石とあります。

天和三年（一六八三）、下ノ切遣毘沙門村・中崎村・中野村とあり、翌年には毘沙門村に一本化されています。貞享元年（一六八四）の家数は三五軒でした。貞享四年、金木組に属し、同年の「検地水帳」によれば、田四五町歩、畑二町歩、村高四二二石でした。一〇年ほどで一氣に開発が進んだ様子が分かります。

「其田家由緒書」によれば、文政五年（一八二二）頃には飯詰川付近に下毘沙門村が開かれました。天保五年（一八三四）の「郷帳」には一〇五石とあります。飯詰川の掘り替えや長富村始まりの時期と相前後します。明治に入り北津軽郡毘沙門村、のち北津軽郡嘉瀬村の大字、五所川原市の大字と移り変わってきました。

字名として、東中久保、中熊石、下熊石、上熊石、西中久保、西熊石、熊石があります。この広範囲にまたがる熊石とは何に由来するものなのか不明です。

また、支村として中崎、中野新田、下毘沙門があります。現在も通称名として残り、中崎橋、中崎溜池、中崎リング組合、中野新田集会所等の名が使われています。いずれも



図128 毘沙門 鹿嶋神社

明治九年（一八七六）、毘沙門と合併しています。共栄地区は、昭和一〇年（一九三五）頃、一〇軒程が入植し、開拓が始まりました。鹿嶋神社は、貞享四年（一六八七）の「検地水帳」に毘沙門堂、安政二年（一八五五）には毘沙門宮と記され、明治三年（一八七〇）、鹿嶋神社に改めたとの記録が残されています。また、毘沙門・長富コミュニティセンター近くの稲荷神社は、文化二年（一八〇五）に勧請されました。境内の石柱や庚申塔に、中野新田、小森菴、西大菴の地名が刻まれています。

明治一二年（一八七九）、毘沙門小学校が創立されました。その後、嘉瀬小学校分校、毘沙門、簡易、尋常、国民学校を経て、昭和二年（一九四七）、新制毘沙門小学校がスタートしました。同五八年（一九八三）、小学校に隣接して農村公園が整備されました。平成二四年、一野坪小学校、沖飯詰小学校、飯詰小学校とともに四校が統合されて、いずみ小学校に生まれ変わりました。

現在、山間部から平地へと変化に富んだ、のどかな田園風景が広がります。冬場は地吹雪の難所でドライバー泣かせの区間でしたが、現在は防雪柵が完備され、通行もスムーズになっています。この辺りの家屋では、今でも「カッチョ」と呼ばれる自前の柵を設置し、北西からの厳しい風雪を防いでいます。

昭和四八年（一九七三）、地区の東部に広域新農業センターが完成しました。その後、毘沙門牧場や畜産資料展示館、農業センターなどを含めたグリーンバイオ村ができ、農業体験の場として活用されています。また、コテージ三棟を備えた宿泊施設があり、栗拾い

の体験など家族で自然に親しむ場として知られています。

町内会は、毘沙門、旭・新田、中崎、共栄、中野・川端があり、それぞれ活動しています。平成二六年三月末の世帯数は二二八、人口は五五〇です。

長富（ながとみ）

東は二ノ沢溜池を挟み中柏木、西と南は毘沙門及び中柏木が飯詰川に沿うように、北は嘉瀬と接しています。ただ、この辺りは旧五所川原市と旧金木町との境界線がとても複雑です。

地区の中心を新田の国道三三九号が、西方をこめ米ロードが南北に走ります。また、飯詰川が南東から北西に流れ、それぞれの道路と交わる位置には長富橋、新長富橋、西長富橋が架けられています。西部は一段低く水田が広がります。北・東部は山手で一段高く、大少数の溜池が点在し、その周辺は水田やリンゴ畑です。

本地区は、地形その他の条件が許さず、開発が遅れました。文化元年（一八〇四）、飯詰村の新岡仁兵衛が東側の中柏木村の湿地を開発しました。次に、二ノ沢、三ノ沢の空き地開発を弘前藩から仰せつかり、募集した農民達とともに新田を開いていきました。同六年には、水田が三三町歩、家数が六七軒までに増えました。同年九月、九代藩主である津軽寧親がこの地を視察した際、大変満足され、「末長く富み栄えるように」との願いを込めて長富村と命名されました。

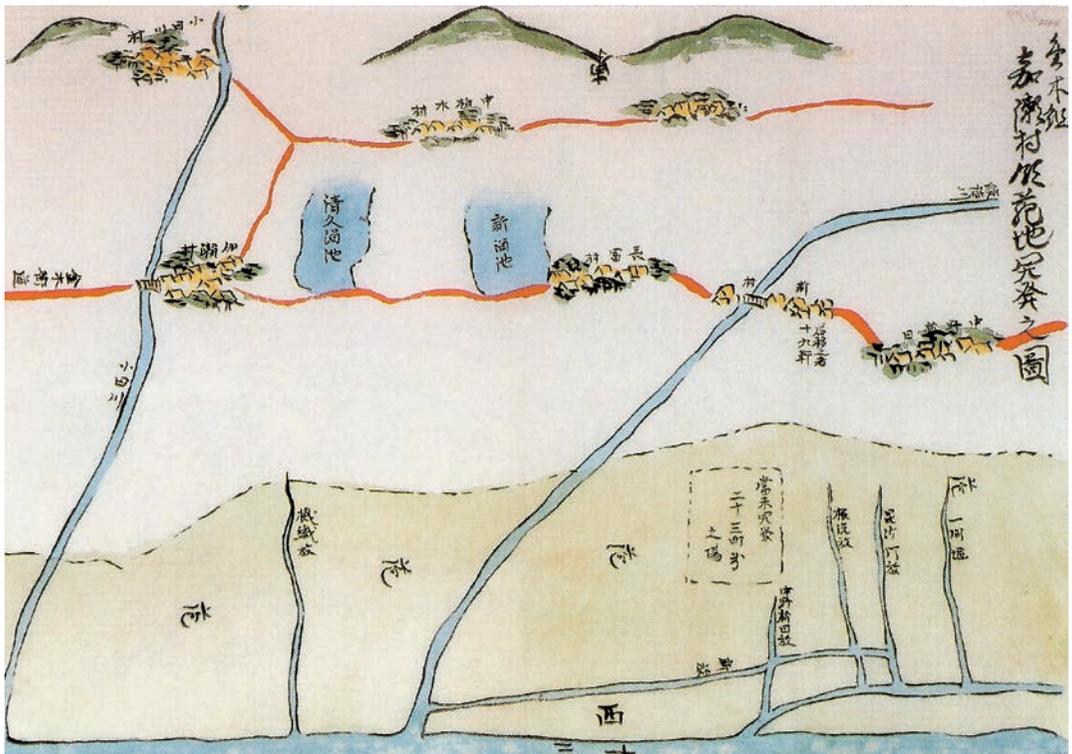


図129 金木組嘉瀬村領地開発之図（『津軽家文書抄』より）

その後は其田弥太郎が中心となつて開発を進めていきます。文政二年（一八一九）には飯詰川を現在の長富を通る位置に掘り替えています。それにより、下岩崎から川の西側を通り、長富村に出ることが可能となりました（『五所川原三百年史 経済編』）。

文政六年作成の「金木組嘉瀬村領地開発之図」（図129）には、南から北に延びる金木街道に沿つて、村名と家並みが描かれてあります。中野新田の次は、飯詰川に架かる橋の前後に新村（居住之者十九軒」と添え書きがあります）、長富村、新溜池（二ノ沢溜池）と清久溜池西側を経て、嘉瀬村とあります。東の山手には、小田川村、中柏木村も見えます。西の旧十川沿いは広く「菴」と表記され、飯詰川や小田川、数本の堰が東から西に流れ込んでいます。新村の西の菴に「当未開発二十三町歩之場」が明記されています。苦勞の末に菴を新田にしていった様子がうかがえます。

さらに、其田らは文政七年（一八二四）から天保元年（一八三〇）にかけて二ノ沢（長富）溜池も築きました。その際、西側に堤防も築いたため、毘沙門から長富を経て、嘉瀬・金木へと通じる新道（小泊道）が開かれました。それにより、交通の便がぐんと増します。なお、明治三六年（一九〇三）、五所川原と長富間の県道一六九間（約二・一km）を、当時のお金で八四七円をかけて幅三間（五・四六m）に拡張しています。

天保五年（一八三四）の「郷帳」に金木組長富村高二二石、下長富村三一七石とあります。明治に入り北津軽郡長富村、のち北津軽郡嘉瀬村の大字、五所川原市の大字と移り変わってきました。

字鎧石の東部にある長富遺跡は、縄文時代前期末の竪穴住居跡が確認され、土器や石器も見つかっています。長富から嘉瀬にかけての台地上には縄文・平安時代の遺跡が並びます。昔も今も人々のくらしに適した場所だったのでしよう。

国道三三九号沿い、二ノ沢溜池西側には「文化の松」があります。新岡仁兵衛が開村の際、記念に植樹した二本のクロマツのうちの一本です。高さ一三m、枝幅一三×一三m、目通り二・二二mで、五所川原市の名木に指定されています。

文化一四年（一八一七）、新岡氏の館神として飛竜宮が勧請されました。明治に入り、高籠神社と名を改められ、のち村の産土神とされました。水に関係の深い神を祭っています。なお、新岡仁兵衛の墓は、国道沿い、神社の北側一〇〇m程の所にあります。

長富地区は他に比べて、字名が大変ユニークです。竹崎、鎧石、二之沢、添、中放より北、飯詰川より南、中道より南と続きます。特に広範囲を占める鎧石の由来が分からず残念です。また、かつては支村として狐崎（現



図130 文化の松

嘉瀬)も加えられていました。

町内会は、上長富、東長富(東町)、中長富、下長富があり、それぞれ活動しています。平成二六年三月末の世帯数は一七六、人口は四二四です。

ホロムイチゴ(幌向苺)と浮島

昭和四八年(一九七三)、二ノ沢溜池の浮島において発見された大変珍しく貴重な植物です。県内初、全国的にも幻の花と言われています。昭和五〇年(一九七五)、市では文化財(記念物)に指定し、その保護に努めています。英語名クラウドベリーで知られ、果実はコハク色で、ビタミンCや繊維質豊富です。

また、この溜池は浮島でも知られ、「津軽じょんから節」の一節に「さても不思議な長富ため池 池の真ん中サ、浮き島あって 風の吹くたび、ヤレ西東」とあります。江戸時代、ある藩士が、溜池の決壊を防ぐために柴を藤づるで編み、水面に浮かせたところ、波が立たず陸地が削れることもなくなり、大層効き目があったそうです。その後長い年月を経て、現在の浮島になったようです。



図131 ホロムイチゴ



図132 二ノ沢溜池の浮島(国道沿い、南より望む)

范は「やち」と読みます。方言では「やぢ」とも言います。范は低湿地の意味です。

中学時代、釜范姓かまやちの同級生がいました。同じ学区である隣村に横范があり、特に范という文字に対し違和感をもった記憶はありませんでした。

高校時代、昭和四五年（一九七〇）頃クラスの中で漢和辞典に范の漢字が載っていない事を見つけた同級生がおり、いくつかの漢和辞典を調べても掲載されておらず話題になった記憶があります。当時范が津軽で作られた国字こくじであることを知りませんでした。いまだ漢和辞典はもちろんパソコンにも登録され利用されています。

少し歴史をさかのぼり范字が諸書でどのように取り扱われているかみてみます。

「津軽郡中名字」は天文年間（一五三二〜五四）北畠氏の作で津軽地方の地名を郡ごとに書き上げたものです。この中に范と関連すると思われる地名があります。

鼻和郡大浦七郷 名久井范なぐいやち

名久井范は現在の弘前市中崎に比定されています。

「津軽郡中名字」は原本が伝わらず長い年月の間に書写されたものが残っています。この范が原本のままかどうか、どの程度信用してよいか疑問も残ります。ただ范にヤチとふりがながついていることが注目されます。范の文字を用いていない点が逆に書き換えてい

ないのではないか、原本の文字のままなのではないかと思われる。

范は『大漢和辞典』にも掲載されており、読みと意味は「デイナイ 草が根をあらはす・露の濃いさま」と記載されています。

范の意味とは違うようです。この文字が元で後に変化して范になったとも考えることはできるでしょうか。范の文字が中世まで遡るかは今後の研究にかかっています。

江戸時代に入って范の使用例としては、正保二年（一六四五）の「郷帳」・「津軽郡之絵図」、慶安年間（一六四八〜五一）の「御郡中絵図」に范中村の村名が見え、これは早い方であろうと思います。

范中村は現在弘前市の大字となっています。

范の文字が一七世紀に新田開発や地名に使われていたことは、「弘前藩庁日記」などを始め他の古文書で確認されました。「弘前藩庁日記」で使用されていることは、藩がこの文字をどのように認識して使用したか不明ですが、藩がこの文字を使用することを認めていたことになりました。またそれだけ一般に流布りゅうぷしていたことにもなります。

江戸時代後半の『俚言集覽』(太田全斎著)に「津軽にて草ありて水ある処をヤチといふ、菴字を訓り、草包水の会意なりといへり、釜菴といふ所あり、菴字にもありと云、江戸近在にて草茂りて水ある所をヤと云」とあります。

菴の文字は江戸時代の国語辞書『俚言集覽』に取り上げられ、中央にも知られていたようです。菴は既成の字と字とを、意味の上から合わせて一つの新しい字としたといえます。

紀行家菅江真澄が寛政八年(一七九六)一〇月二七日鱒ヶ沢町菅菴を訪れたときの紀行文が「雪のもろたき」に載っており、菅菴について次のように書いています。

「菅菴(野地といい、谷というのも、みなおなじである。しかし、菴という字をつかうのはこのあたりばかりである)という村が見え」とあります(『菅江真澄遊覧記3』)。菅江真澄は菴の文字を津軽地域の人々だけが使うのを見抜いていたのです。

津軽の人、兼松石居の「津軽方言考」(安政(慶応)には、「沮沢(これ)之をヤチと云、ヤチとはヤセツチの略言にて、(土)の義なるべし、方俗菴の字を造りてヤチとよましたり」とみえます。兼松石居は、菴の字を津軽の人が作ってヤチと読ませ、湿気多い地であることを記しています。

明治九年(一八七六)の『新撰陸奥国誌』には、「ヤチ ヤチ或は菴の字を用ふ。普通には谷地の字を用て水沢叢莽の地を云ふ。(中略)当郡多く二大区以西菴の字を通用すれとも菴の字出処詳ならず」とあります。

『新撰陸奥国誌』は青森県の命により岸俊武が編纂したものです。岸の出身地は不明ですが、津軽の菴の文字に興味を持ったようです。ヤチは普通谷地を用いるが津軽では菴の文字を用い、さらにその出所は不明であると記述しています。

諸書の見解をみると、菴の文字は江戸時代に津軽で作られ、津軽のみで使用されたものであることが諸氏によって指摘されてきました。

現在では小型の漢和辞典はもちろん、パソコンでも簡単に出てくる文字として取り扱われています。また何種類かの地名辞典には菴が地名用語として掲載されています。

江戸時代初期から津軽平野の北半分は湿地帯で新田開発が盛に行われた地域でした。菴はこの湿地帯を特に意識してできたものでしょうか。

それにしてもだれがいつわざわざこの文字をつくったのでしょうか。興味がわく文字です。

菴のつく地名としては五所川原市内に次のものがあります。

大字姥菴、大字鶴ヶ岡字中菴・鶴菴、大字藻川字光菴、大字一野坪字朝日田には通称として前菴(「まやち」ともいう)があります。前菴は町内会名としても使われています。市浦地区の十三には元小字の五月女菴があります。

また、名字には釜菴があります。さらに菴から派生した方言としては、湿地帯に作られた水田のヤチタがあります。ヤチタはぬかるみの瘦せた土地で、収穫量は少なかったようです。